

# 茨城県ケアラー・ヤングケアラー実態調査結果の概要

1. 調査目的 ケアラー・ヤングケアラーと支援機関双方の課題やニーズを把握し、必要な支援策を検討するために本調査を実施。
2. 実施時期 ・ヤングケアラー実態調査：令和4年4月～7月 ・ケアラー実態調査：令和4年5月～7月
3. 調査対象 以下のとおり

## <ヤングケアラー実態調査>

### (1) 児童・生徒

対 象	対象人数	調査方法
小学6年生(全体の約1割の人数を抽出)	約2,400人	書面
中学生 全学年(全数)	約77,000人	WEB
高校生 全学年(全数)	約76,000人	WEB

### (2) 学校

対 象	対象校数	調査方法
小学校 ※各市町村から1校を抽出 (義務教育学校前期課程含む)	44校	WEB
中学校(全校) (義務教育学校後期課程含む)	239校	WEB
中等教育学校(全校)	6校	WEB
高等学校(全校)	125校	WEB

### (3) 要保護児童対策地域協議会

対 象	対象数	調査方法
市町村要保護児童対策地域協議会	44か所	WEB

## <ケアラー実態調査>

### (4) 当事者

対 象	対象数	調査方法
高齢者のケアラー (〔6〕アの利用者)	273人	書面
障害者のケアラー (〔6〕イの利用者)	903人	書面

### (5) ケアラー当事者団体

対 象	対象数	調査方法
家族の会等	15か所	WEB

### (6) 支援機関

対 象	対象数	調査方法
ア 地域包括支援センター	91か所	WEB
イ 障害者相談支援事業所	301か所	WEB
ウ 民生委員児童委員協議会	140か所	WEB

# (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査 (①世話をしている家族の有無等、②認知度)

- 世話をしている家族がいると回答した児童・生徒の割合は、小学6年生が9.6% (6.5%)、中学生が4.5% (5.7%)、全日制高校生が3.6% (4.1%)、定時制高校生9.4% (8.5%)、通信制高校生12.3% (11.0%)となった。 ※ ( ) 内は国調査の数値。
- 世話をしている家族は、いずれも「きょうだい」の割合が最も高く、次いで「父母」、「祖父母」となっている。
- 中高生全体のヤングケアラーの認知度は、2～3割にとどまっている。

## ①-1 世話をしている家族の有無

(%)

	調査数 (n=)	いる	(国調査) いる	いない	無回答
小学6年生	1904	9.6	(6.5)	88.6	1.8
中学生	14212	4.5	(5.7)	92.3	3.2
全日制高校生	15100	3.6	(4.1)	94.1	2.3
定時制高校生	902	9.4	(8.5)	88.0	2.5
通信制高校生	114	12.3	(11.0)	82.5	5.3

## ② ヤングケアラーの認知度

(%)

	調査数 (n=)	聞いたことがあり 内容も知っている	聞いたことはある が、よく知らない	聞いたことはない	無回答
中学生	14212	21.9	19.0	58.6	0.4
全日制高校生	15100	24.1	17.0	58.2	0.7
定時制高校生	902	20.2	15.7	63.0	1.1
通信制高校生	114	36.0	14.0	46.5	3.5

## ①-2 世話をしている家族【小学6年生】 (複数回答)

(%)

	調査数 (n=)	母親	父親	祖母	祖父	きょうだい	その他	無回答
小学6年生	183	21.3	14.8	13.1	9.8	62.8	7.1	6.6

## ①-3 世話をしている家族【中高生】 (複数回答)

(%)

	調査数 (n=)	父母	祖父母	きょうだい	その他	無回答
中学生	640	22.8	14.8	53.1	8.3	13.1
全日制高校生	538	23.8	19.3	42.2	8.4	16.5
定時制高校生	85	29.4	14.1	47.1	10.6	12.9
通信制高校生	14	28.6	7.1	57.1	7.1	7.1

### ※国調査に関する留意事項

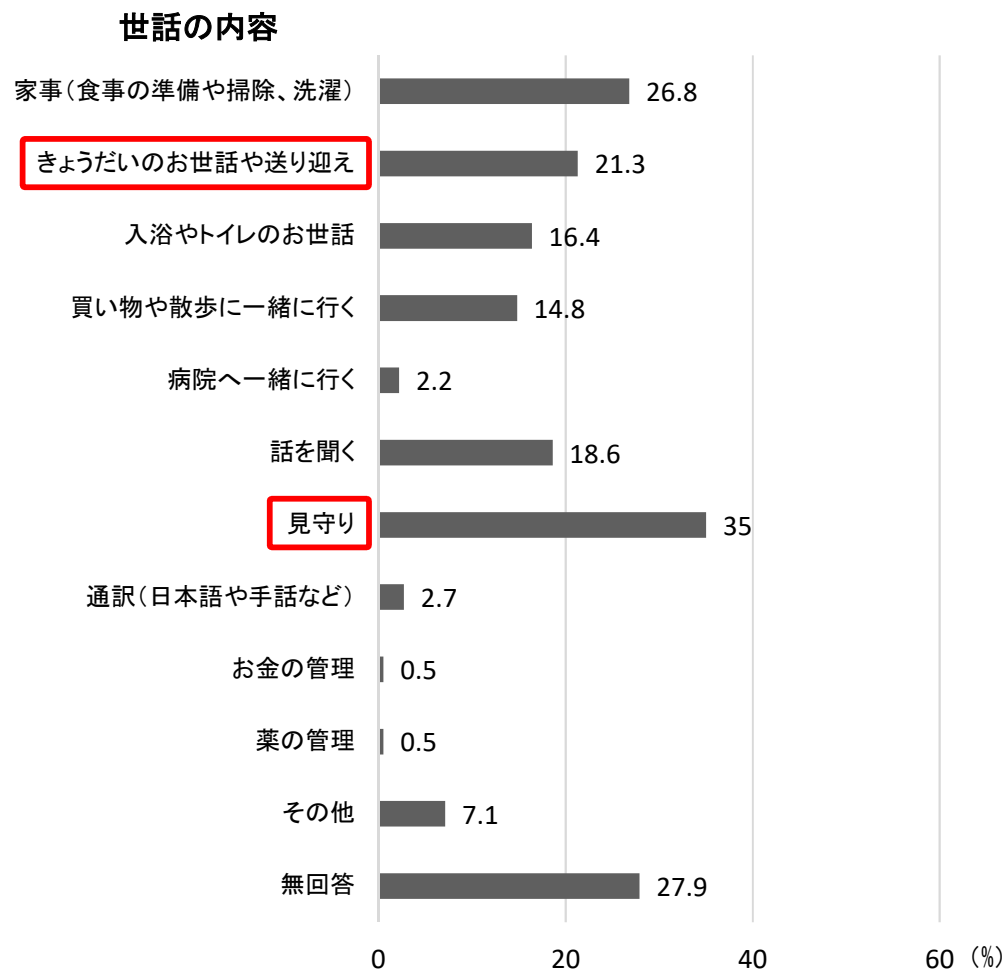
本書における「国調査」とは、厚生労働省が令和2年度から令和3年度にかけて実施したヤングケアラー実態調査を指す。  
本県の調査とは調査対象が異なり、中学生、全日制高校生及び定時制高校生は2年生を、通信制高校生は全学年を対象としている。

# (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査 (③ 家族の世話の内容)

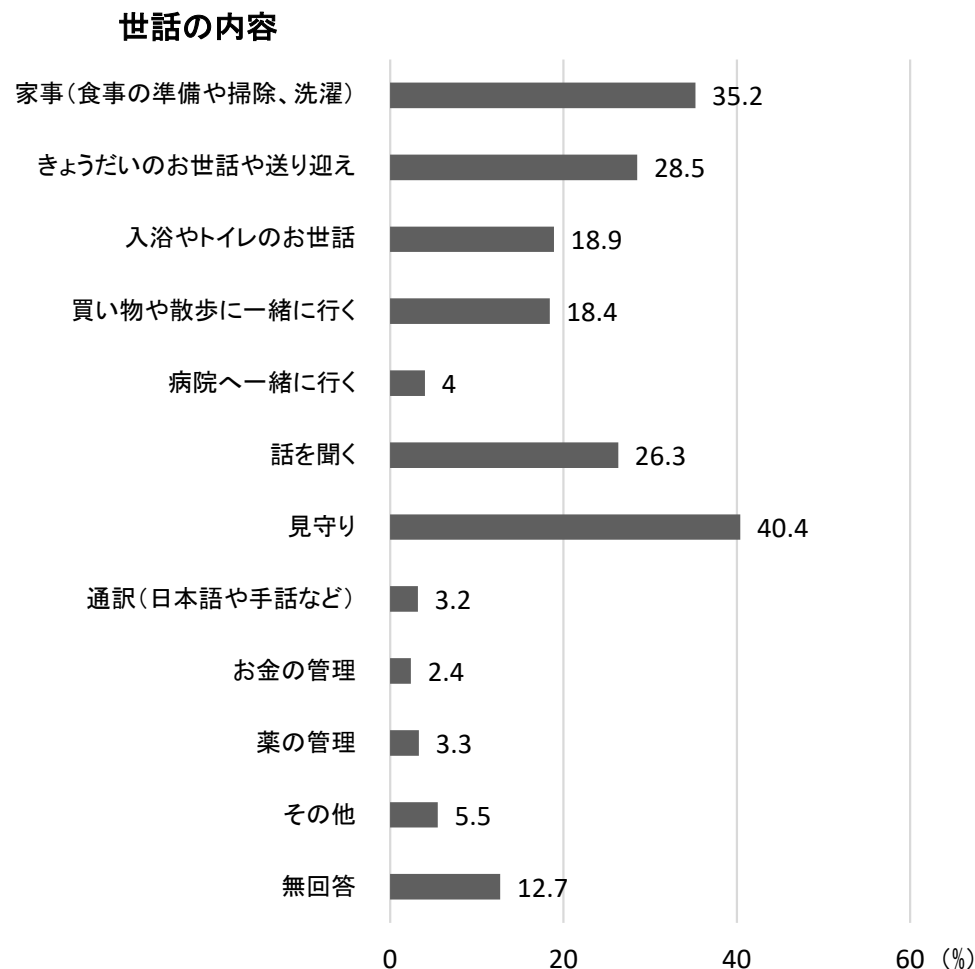
○ 小学6年生、中高生とも全般的に「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」の割合が高いが、小学6年生では、「見守り」や「きょうだいのお世話や送り迎え」の割合が高く、中高生では、父母への世話は「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」、祖父母、きょうだいへの世話は「見守り」の割合が高くなっており、国調査と同様の傾向がみられる。

## ③-1 家族の世話の内容【小学6年生】（複数回答）

### 茨城県

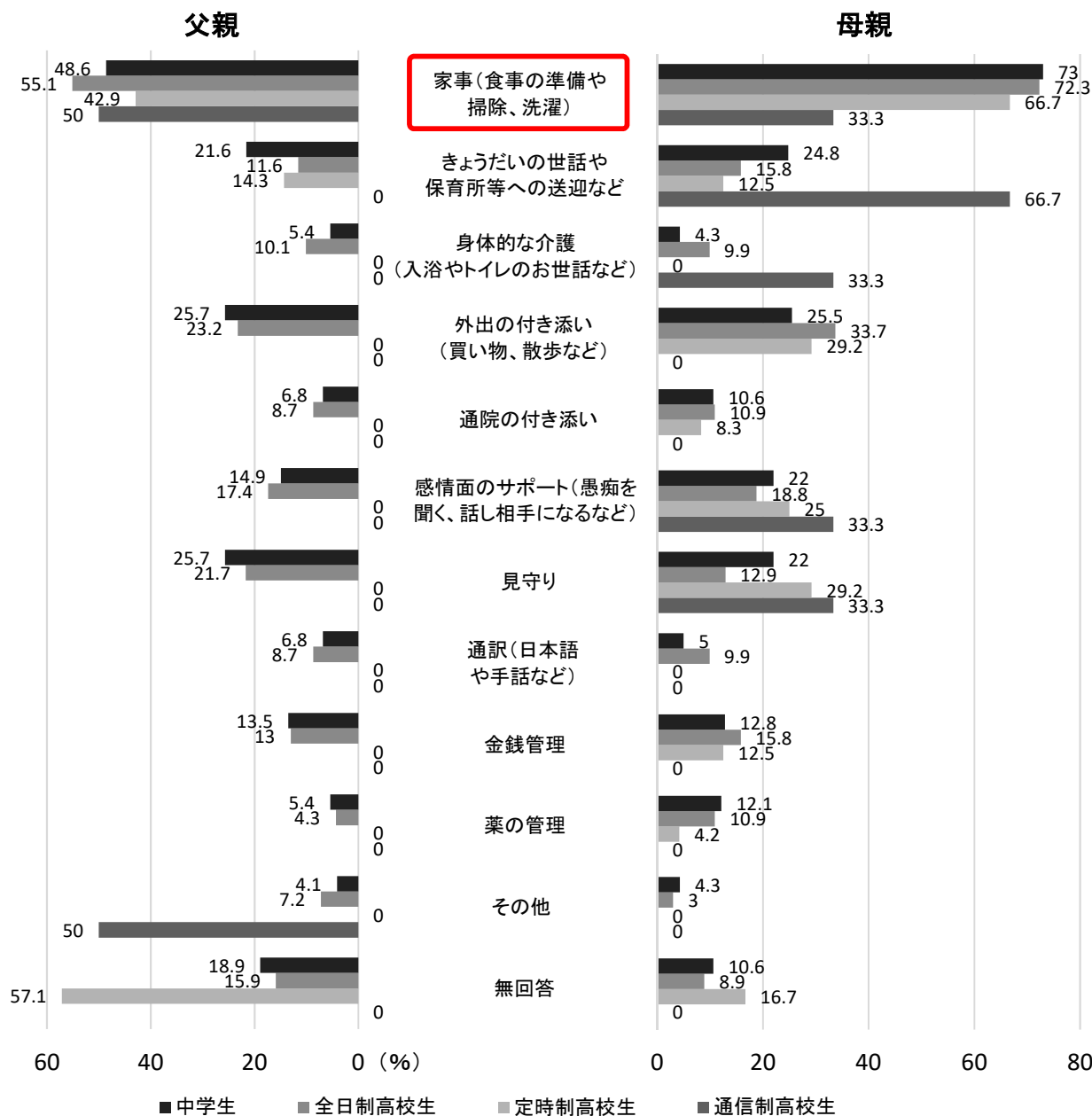


### 全国(国調査)

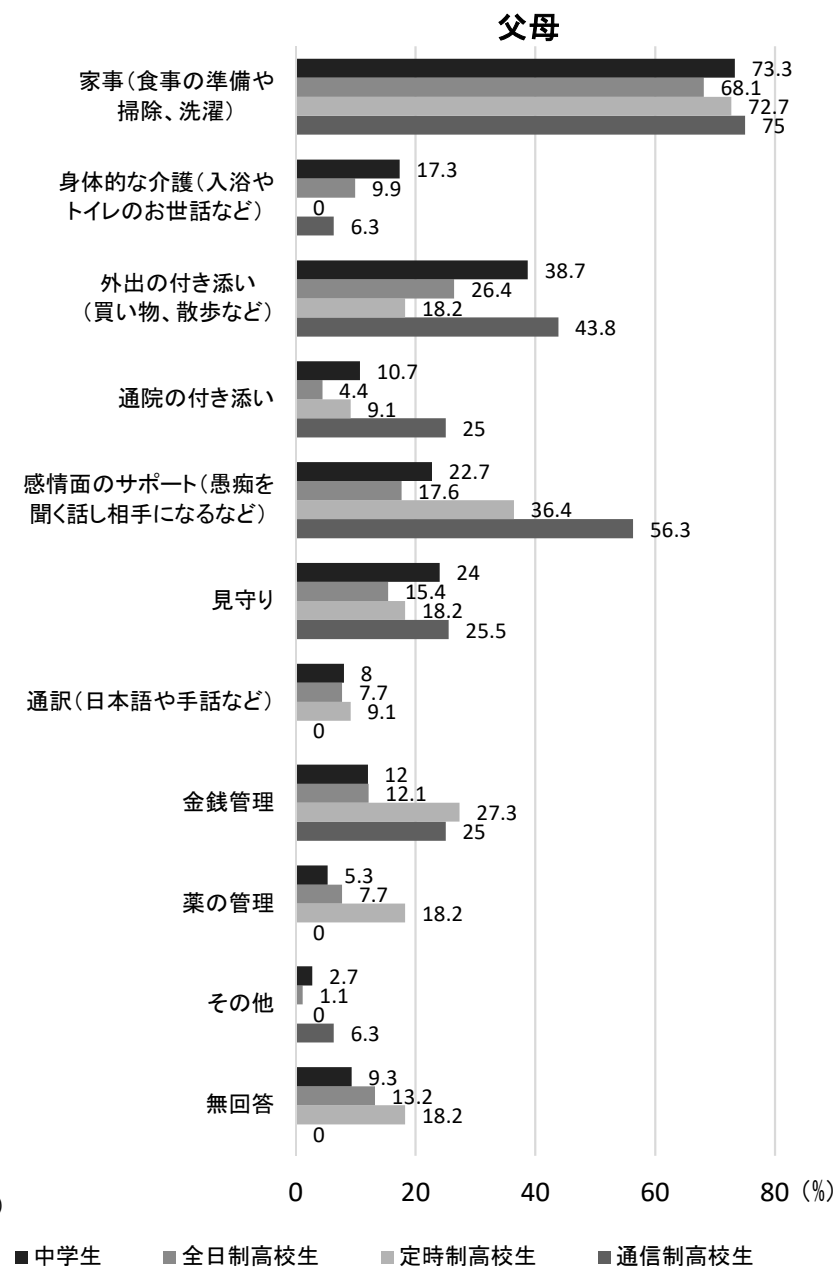


③-2 父母の世話の内容【中高生】（複数回答）

茨城県



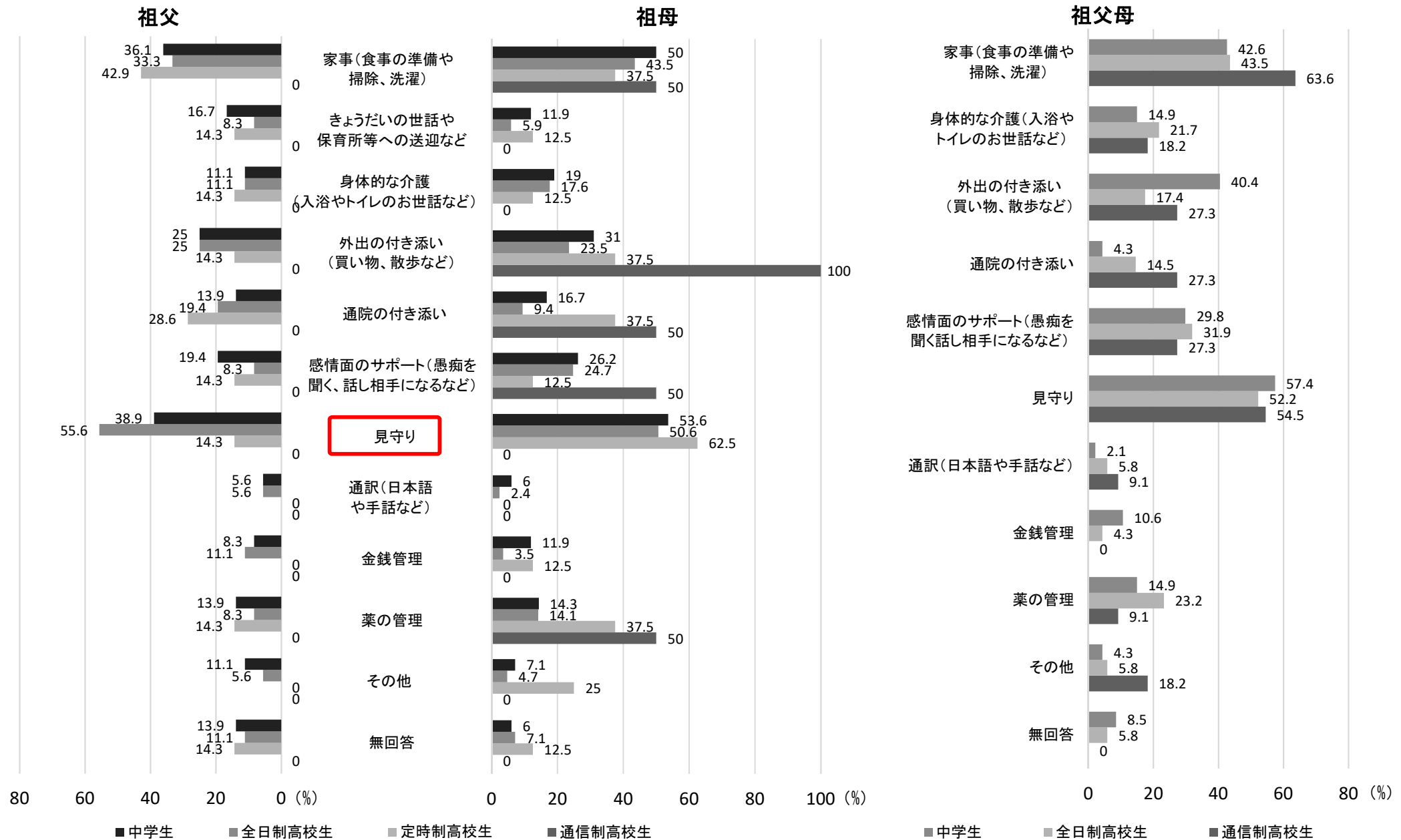
全国(国調査)



③-3 祖父母の世話の内容【中高生】（複数回答）

茨城県

全国(国調査)



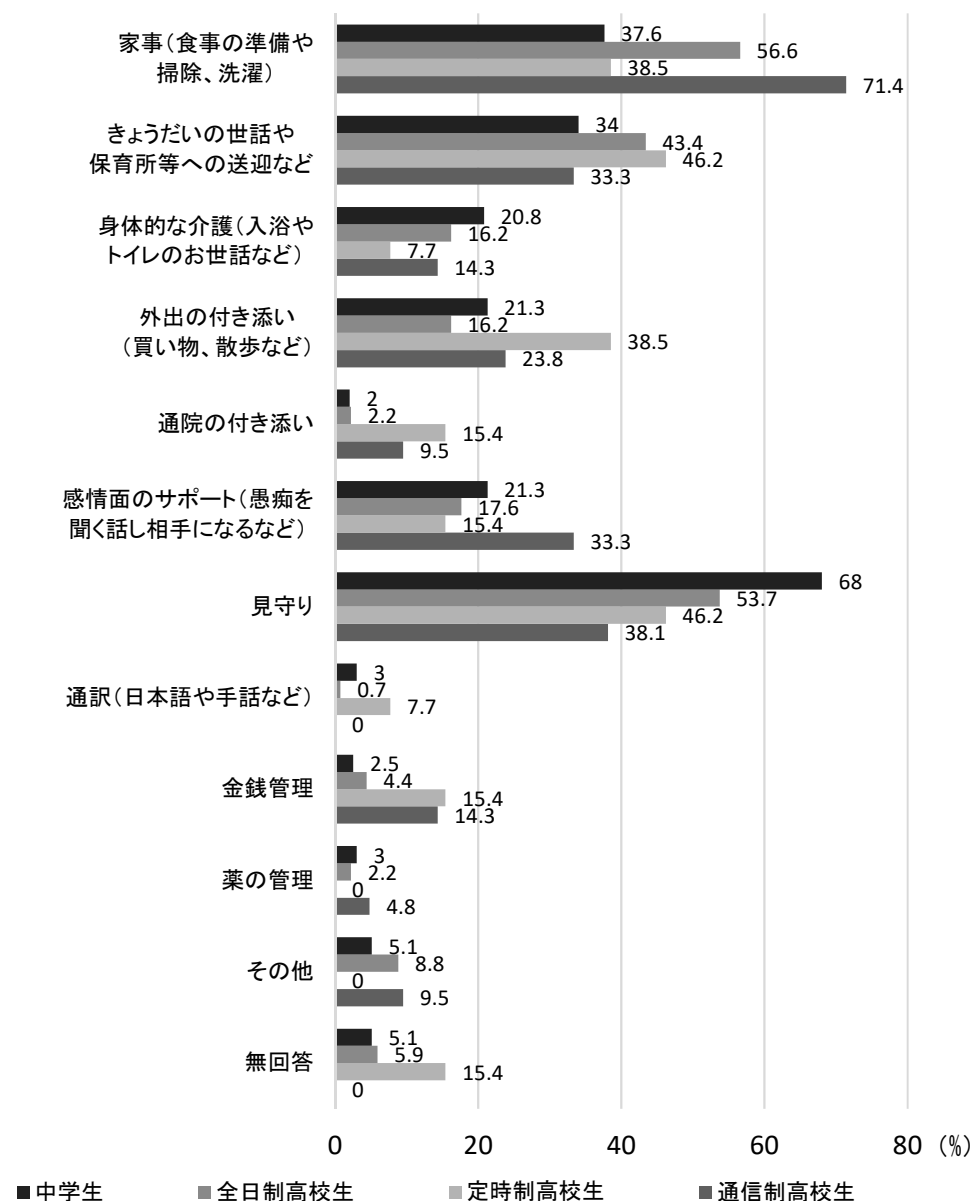
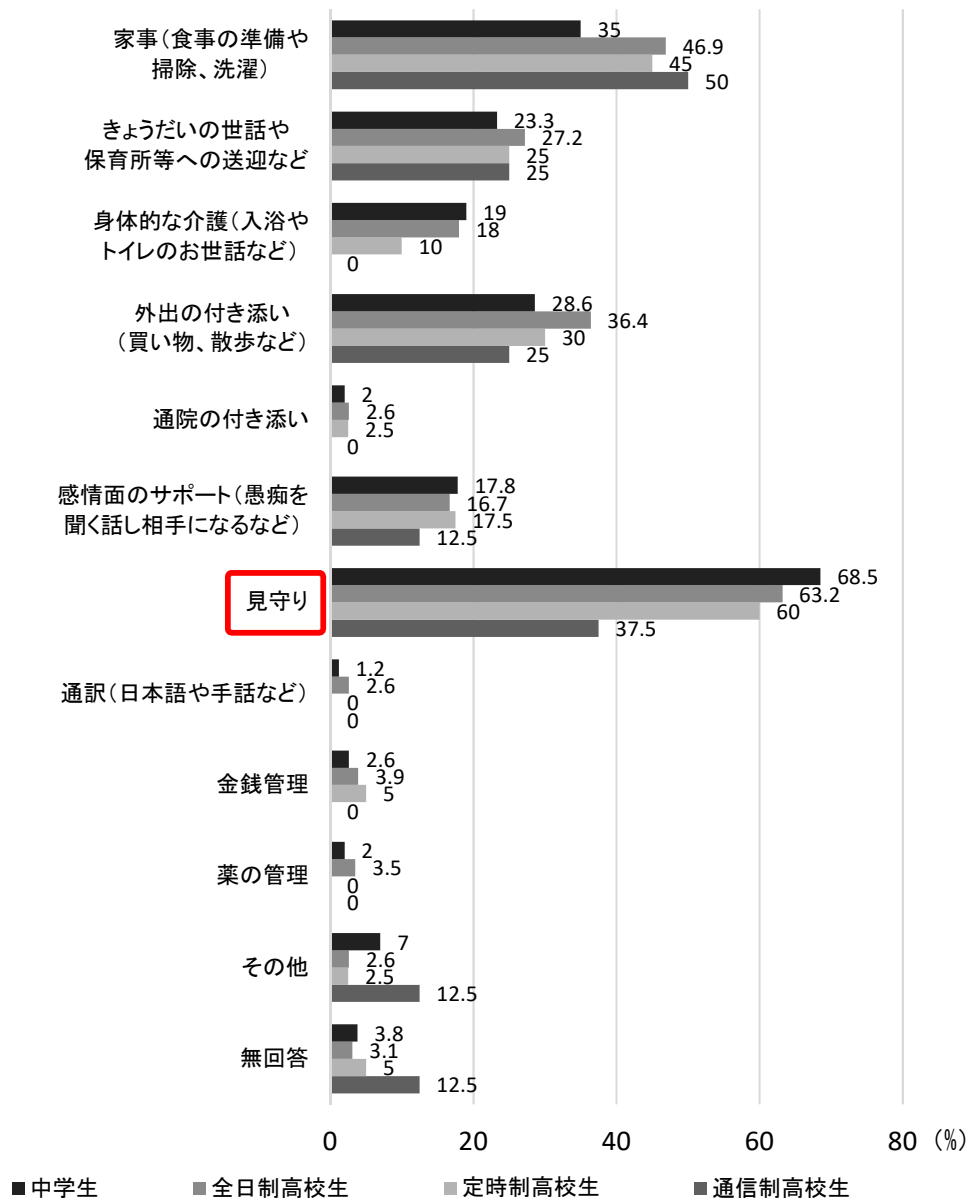
③-4 きょうだいの世話の内容【中高生】（複数回答）

茨城県

全国(国調査)

きょうだい

きょうだい



# (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査 (④ 世話を始めた年齢)

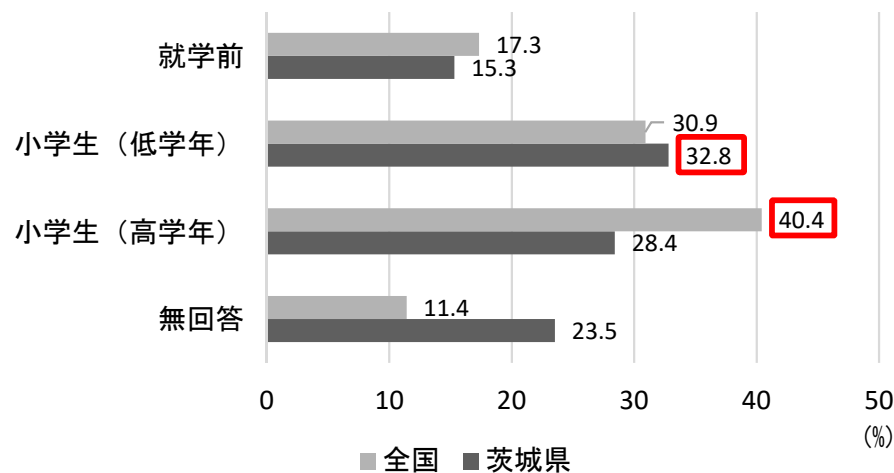
○ 世話を始めた年齢は、小学6年生について、国調査では「小学生（高学年）」の割合が最も高いが、本県では、「小学生（低学年）」が最も高く、中学生については、国調査と同様に、「小学生（高学年）」が最も高く、全日制高校生については、「中学生以降」が最も高い。

## ④世話を始めた年齢

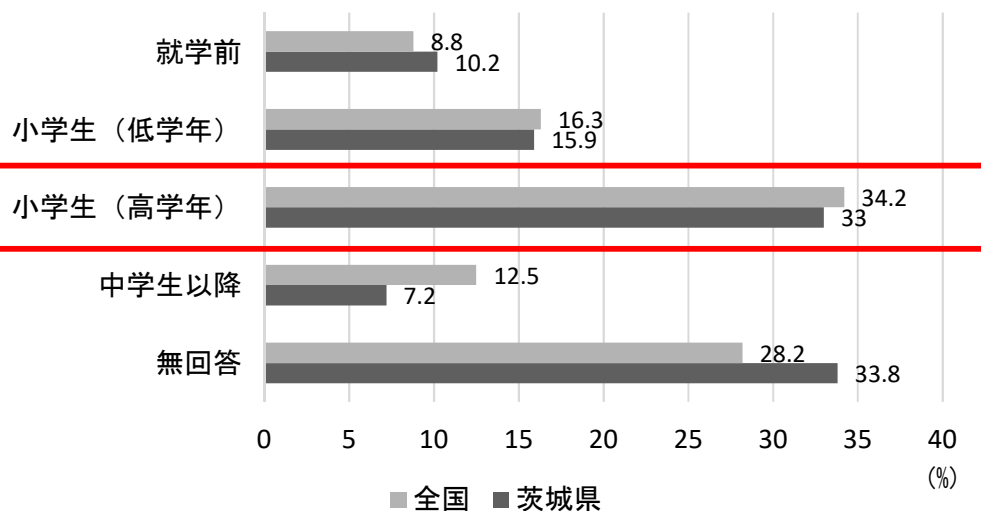
(%)

	調査数 (n=)	就学前	小学生 (低学年)	小学生 (高学年)	中学生以降	無回答
小学6年生	183	15.3	32.8	28.4	-	23.5
中学生	640	10.2	15.9	33.0	7.2	33.8
全日制高校生	538	5.0	7.2	21.0	34.4	32.3
定時制高校生	85	4.7	8.2	25.9	28.2	32.9
通信制高校生	14	0	7.1	14.3	42.9	35.7

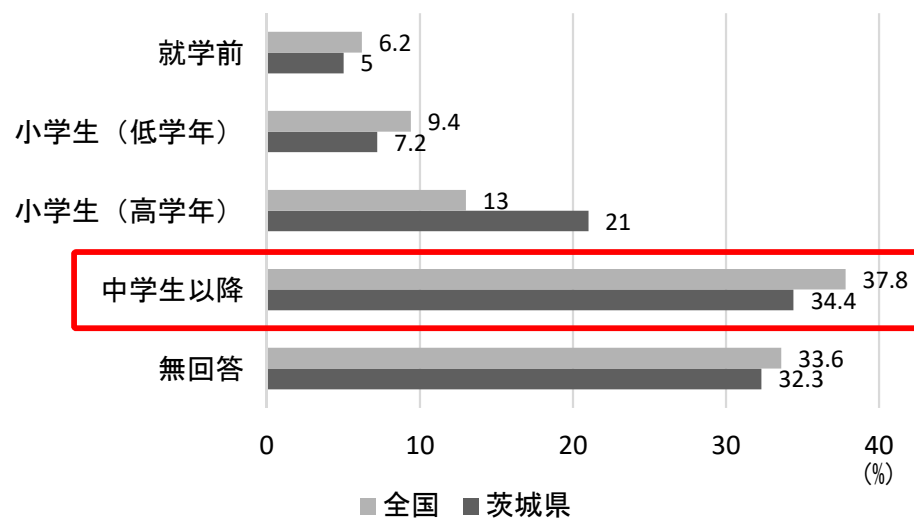
### 世話を始めた年齢【小学6年生】



### 世話を始めた年齢【中学生】



### 世話を始めた年齢【全日制高校生】



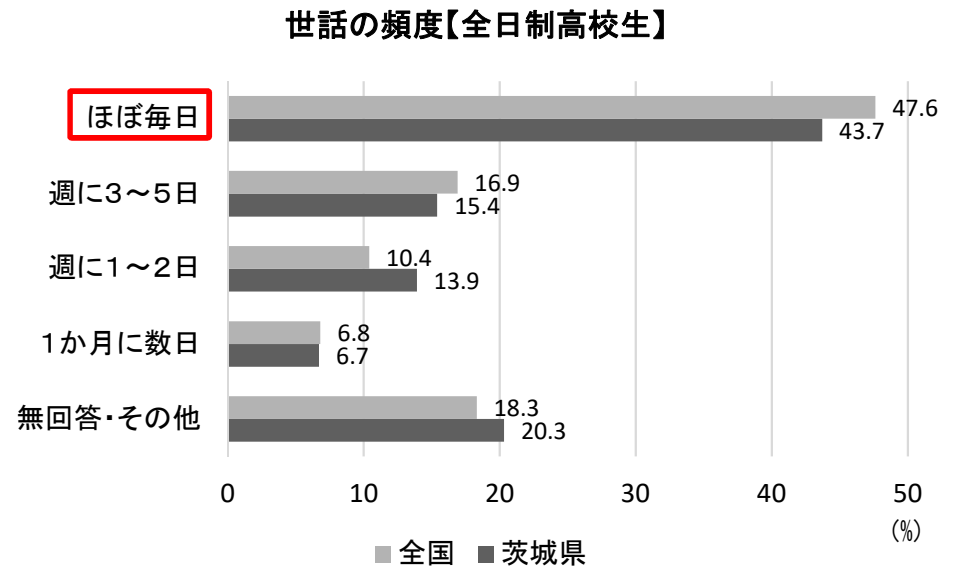
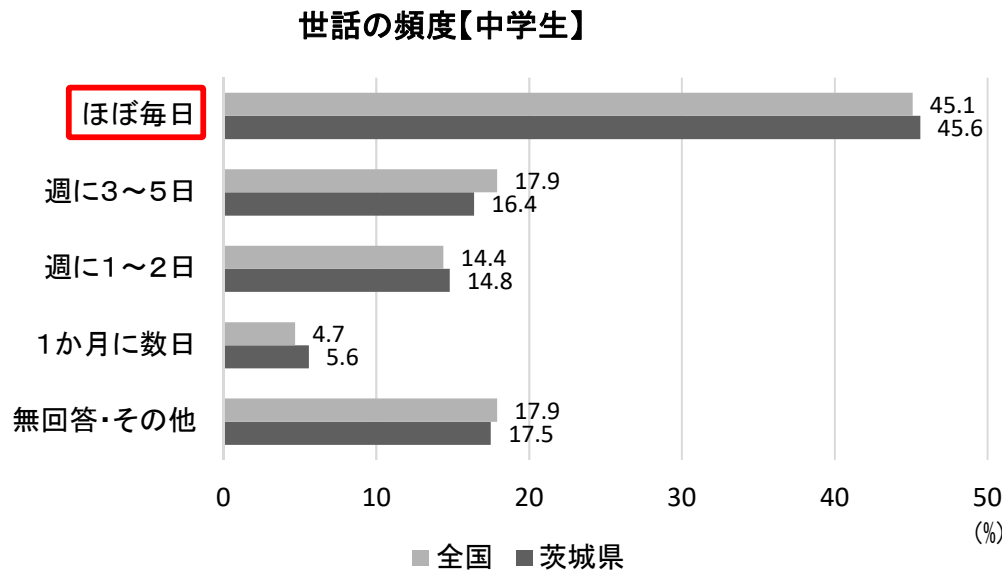
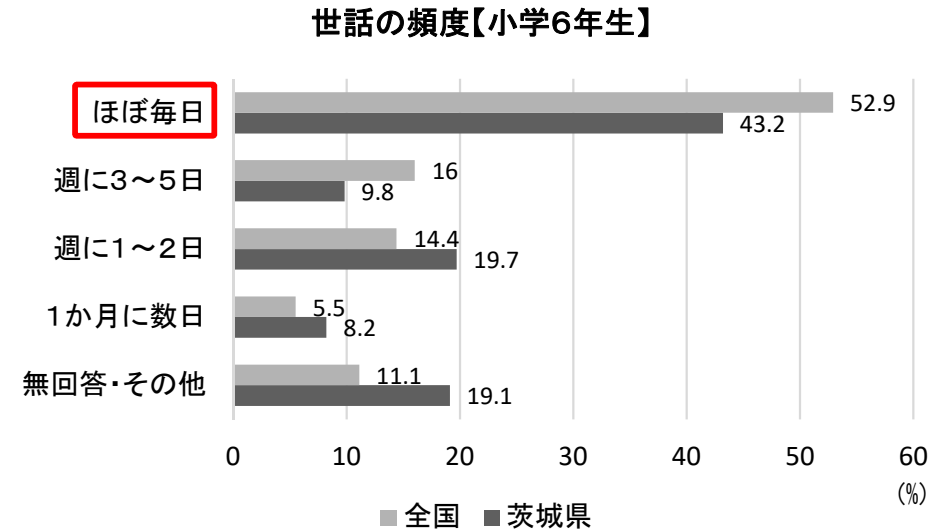
# (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査 (⑤世話の頻度)

○ 世話の頻度は、いずれも国調査と同様に「ほぼ毎日」の割合が最も高いが、小学6年生と全日制高校生では全国より低い。

## ⑤世話の頻度

(%)

	調査数(n)	ほぼ毎日	週に3~5日	週に1~2日	1か月に数日	無回答・その他
小学6年生	183	43.2	9.8	19.7	8.2	19.1
中学生	640	45.6	16.4	14.8	5.6	17.5
全日制高校生	538	43.7	15.4	13.9	6.7	20.3
定時制高校生	85	45.9	12.9	15.3	7.1	18.8
通信制高校生	14	71.4	21.4	0	0	7.1





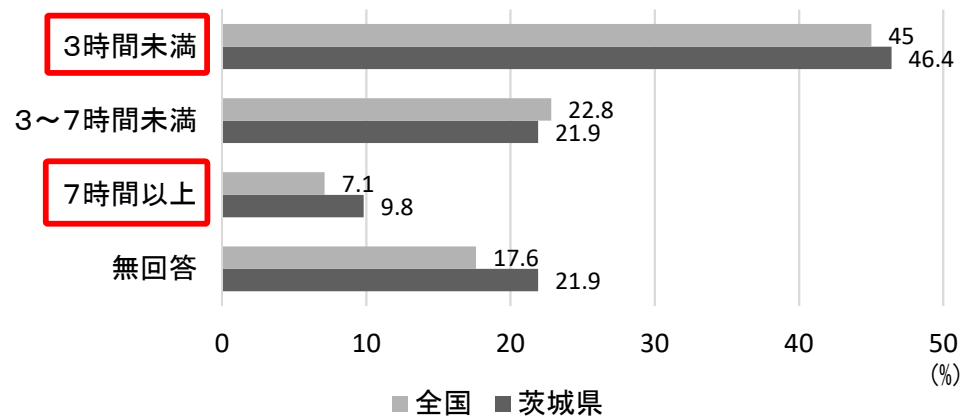
# (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査（⑥世話の時間）

○ 平日1日あたりの世話に費やす時間は、いずれも国調査と同様に「3時間未満」が最も高いが、「7時間以上」も1割弱いる。

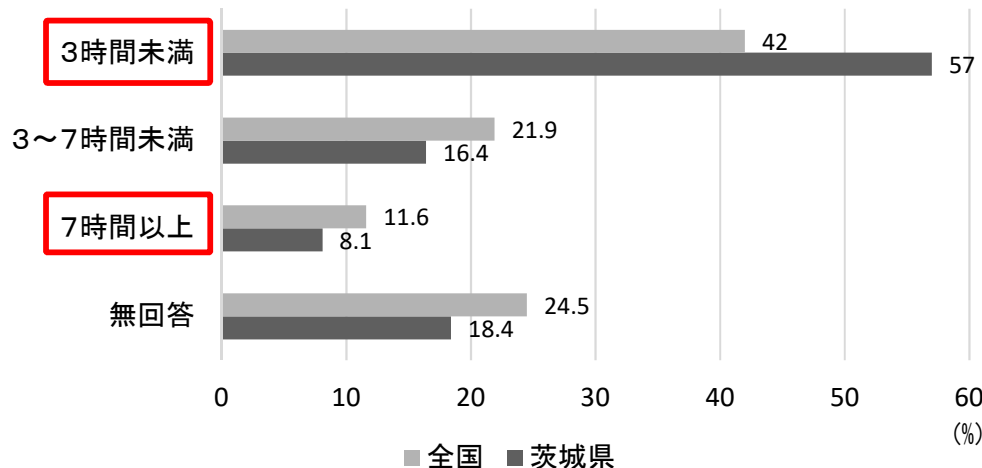
## ⑥平日1日あたりの世話に費やす時間 (%)

	調査数 (n=)	3時間未満	3～7時間未満	7時間以上	無回答
小学6年生	183	46.4	21.9	9.8	21.9
中学生	640	57.0	16.4	8.1	18.4
全日制高校生	538	53.2	18.8	5.0	23.0
定時制高校生	85	48.2	21.2	8.2	22.4
通信制高校生	14	57.1	14.2	7.1	21.4

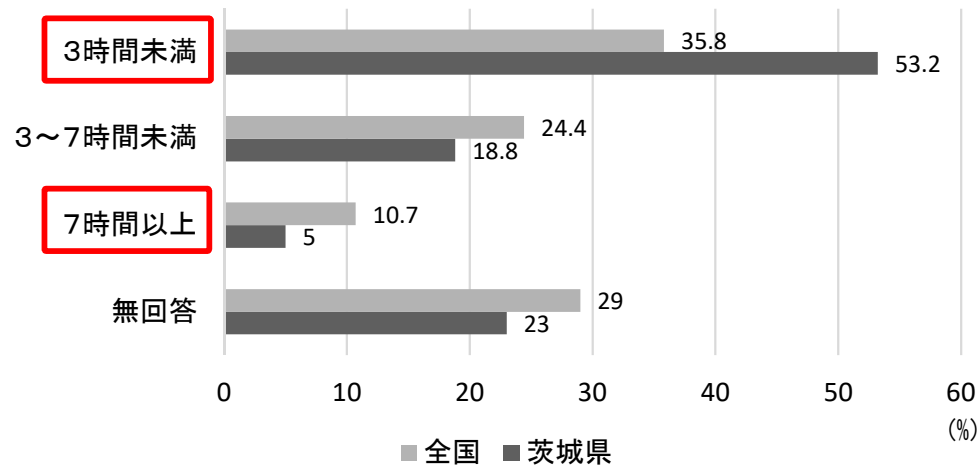
平日1日あたりの世話に費やす時間【小学6年生】



平日1日あたりの世話に費やす時間【中学生】



平日1日あたりの世話に費やす時間【全日制高校生】



## (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査（⑦世話による制約）

○ 世話のためにやりたいけどできていないことは、国調査と同様に、「特にない」が最も高いが、次いで「自分の時間が取れない」が高く、そのほか「友人と遊ぶことができない」、「宿題をする時間や勉強する時間が取れない」、「睡眠が十分に取れない」、「学校に行きたくても行けない」、「進路の変更を考えざるを得ない、もしくは進路を変更した」などの回答もあった。

### ⑦-1 世話のために、やりたいけどできていないこと（複数回答）

(%)

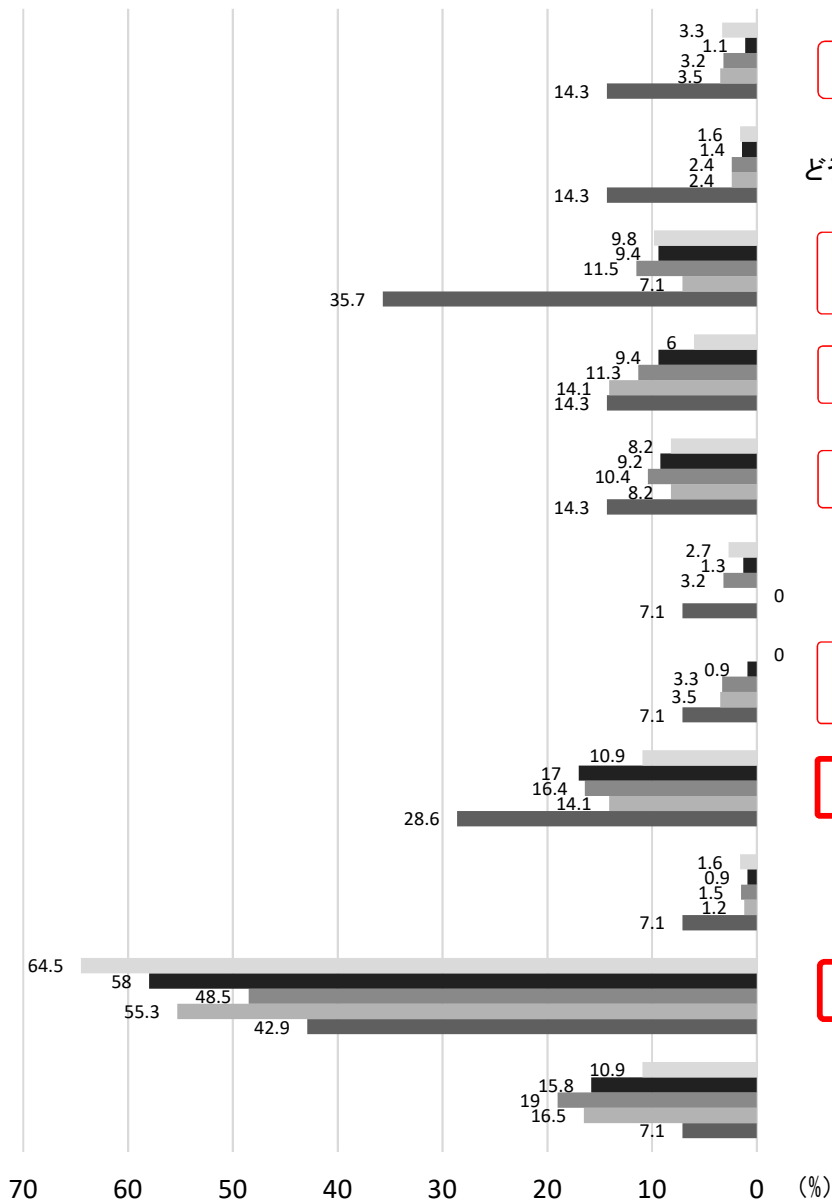
	調査数(n=)	学校に行きたくても行けない※1	どうしても学校を遅刻・早退してしまう	宿題をする時間や勉強する時間が取れない	睡眠が十分に取れない	友人と遊ぶことができない	部活や習い事ができない、もしくは辞めざるを得なかった	進路の変更を考えざるを得ない、もしくは進路を変更した※2	自分の時間が取れない	その他	特にない	無回答
小学6年生	183	3.3	1.6	9.8	6.0	8.2	2.7	-	10.9	1.6	64.5	10.9
中学生	640	1.1	1.4	9.4	9.4	9.2	1.3	0.9	17.0	0.9	58.0	15.8
全日制高校生	538	3.2	2.4	11.5	11.3	10.4	3.2	3.3	16.4	1.5	48.5	19.0
定時制高校生	85	3.5	2.4	7.1	14.1	8.2	0	3.5	14.1	1.2	55.3	16.5
通信制高校生	14	14.3	14.3	35.7	14.3	14.3	7.1	7.1	28.6	7.1	42.9	7.1

※1 通信制高校生の場合には、当該選択肢を「学校に行きたい日に行けない」とした。

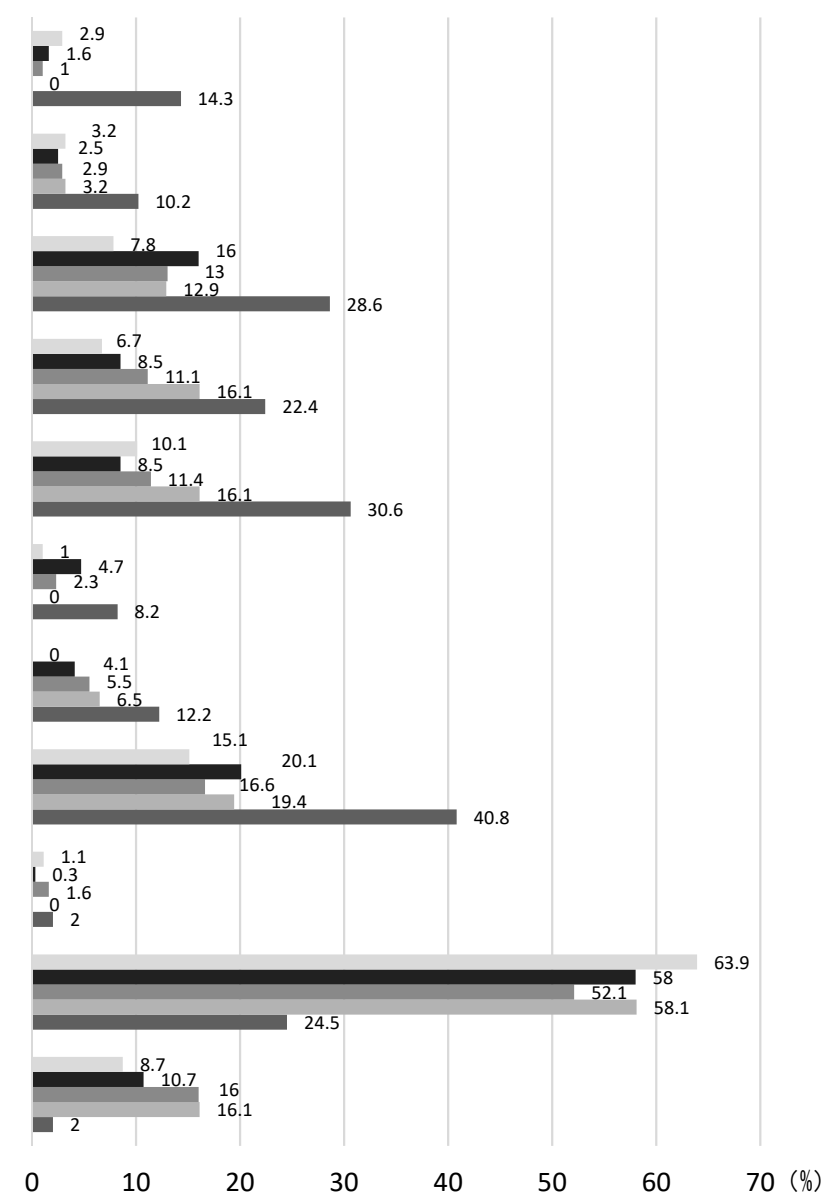
※2 小学6年生の場合には、当該選択肢を設けていない。

⑦-2 世話のために、やりたいけどできていないこと（複数回答）

茨城県



全国(国調査)



■小学6年生 ■中学生 ■全日制高校生 ■定時制高校生 ■通信制高校生

■小学6年生 ■中学生 ■全日制高校生 ■定時制高校生 ■通信制高校生

# (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査 (⑧・⑨ 相談の状況)

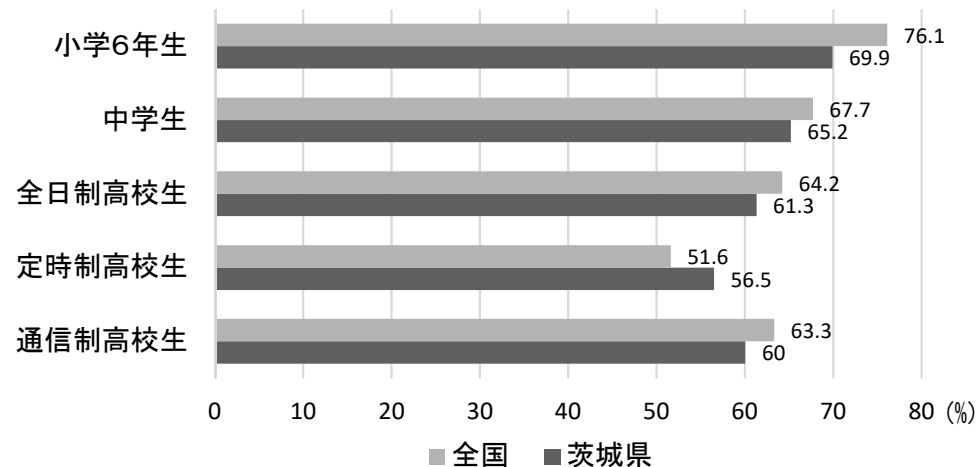
- 世話について相談した経験は、国調査と同様に「ない」が5～7割、「ある」は2～3割にとどまっている。
- 世話について相談したことがない理由は、国調査と同様に「誰かに相談するほどの悩みではない」が最も高いが、次いで「相談しても状況が変わるとは思わない」や「家族外の人に相談するような悩みではない」が高く、「家族のこのため話しにくい」との回答もあった。

## ⑧-1 世話について相談した経験

(%)

	調査数 (n=)	ある	ない	無回答
小学6年生	183	17.5	69.9	12.6
中学生	640	21.3	65.2	13.6
全日制高校生	538	21.6	61.3	17.1
定時制高校生	85	29.4	56.5	14.1
通信制高校生	14	28.6	64.3	7.1

## ⑧-2 世話について相談したことがない割合



## ⑨ 世話について相談したことがない理由 (複数回答)

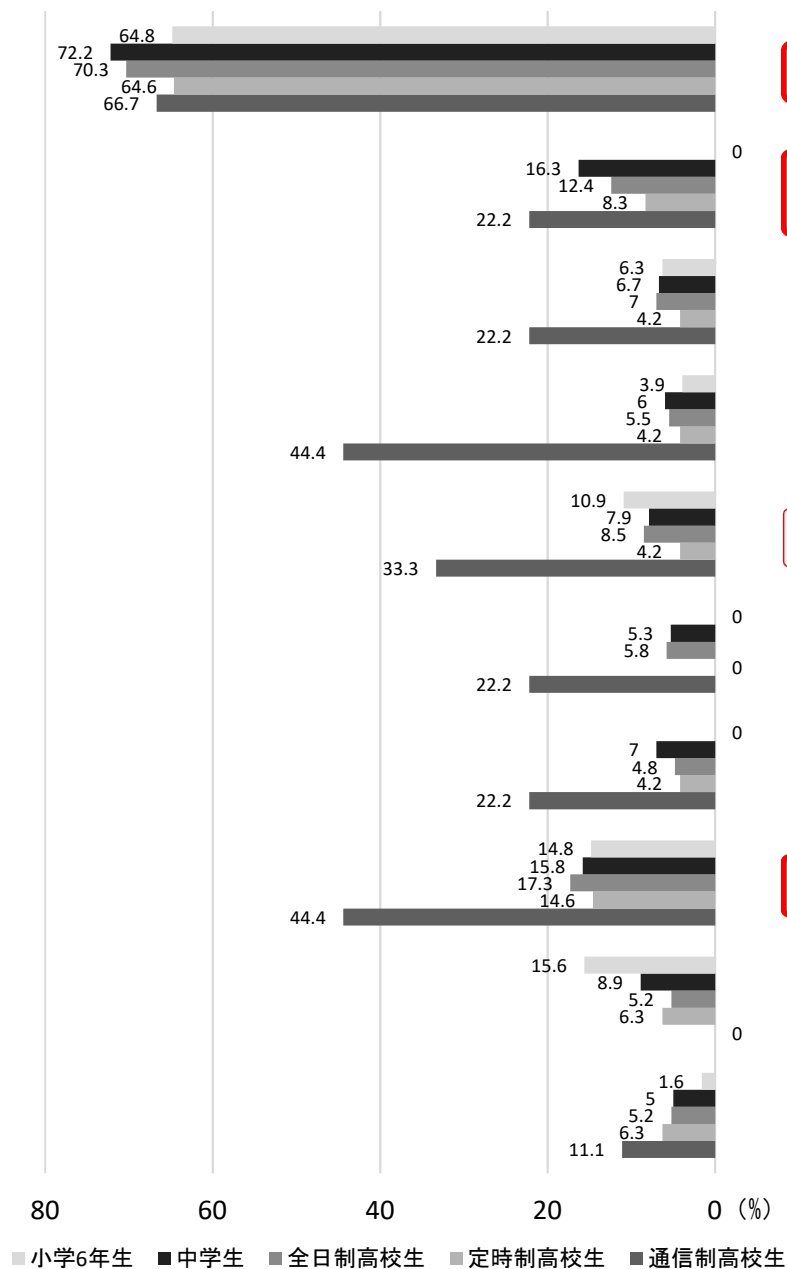
(%)

	調査数 (n=)	誰かに相談するほどの 悩みではない	家族外の人に相談する ような悩みではない	誰に相談するのが よいかわからない	相談できる人が 身近にいない	家族のこのため 話しにくい	家族のことを 知られたくない	家族に対して偏見を 持たれたくない	相談しても状況が 変わるとは思わない	その他	無回答
小学6年生	128	64.8	-	6.3	3.9	10.9	-	-	14.8	15.6	1.6
中学生	417	72.2	16.3	6.7	6.0	7.9	5.3	7.0	15.8	8.9	5.0
全日制高校生	330	70.3	12.4	7.0	5.5	8.5	5.8	4.8	17.3	5.2	5.2
定時制高校生	48	64.6	8.3	4.2	4.2	4.2	0	4.2	14.6	6.3	6.3
通信制高校生	9	66.7	22.2	22.2	44.4	33.3	22.2	22.2	44.4	0	11.1

⑩世話について相談したことがない理由（複数回答）

茨城県

全国(国調査)

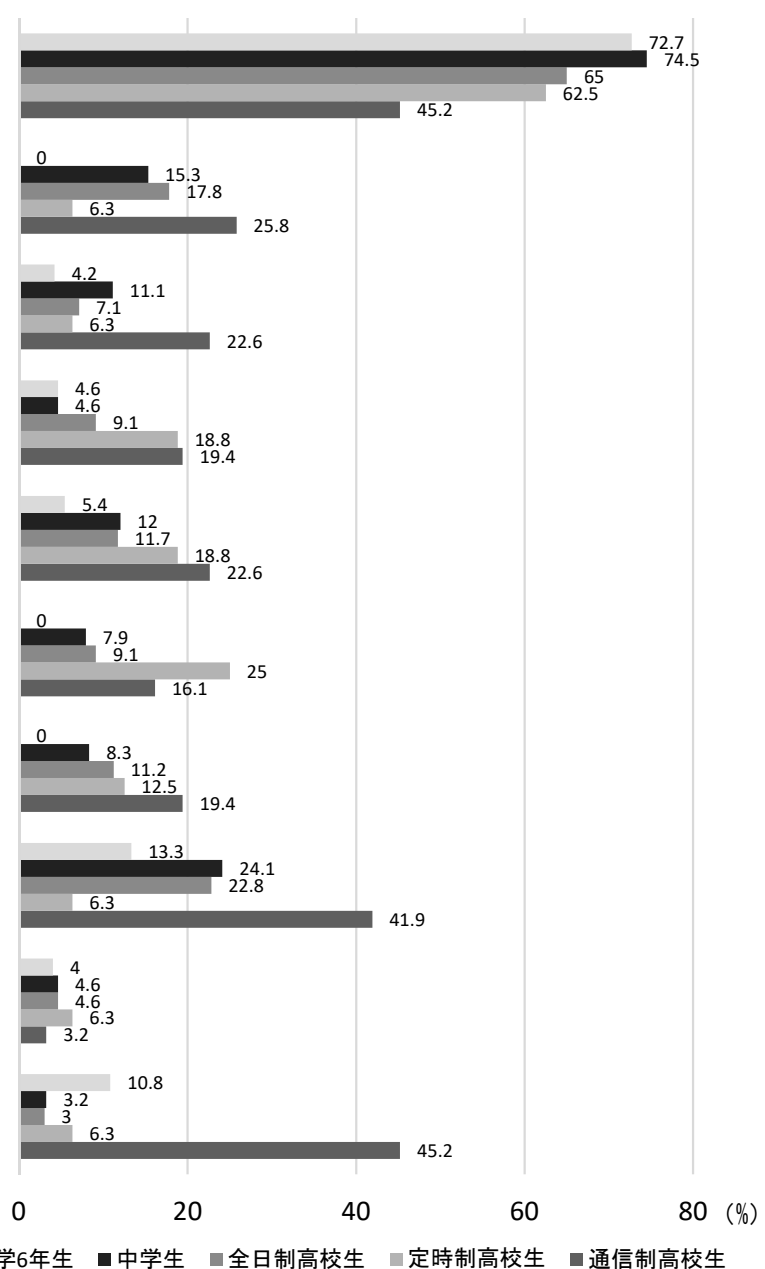


誰かに相談するほどの悩みではない

家族外の人に相談するような悩みではない

家族のここのため話しにくい

相談しても状況が変わるとは思わない



## (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査（⑩求める支援）

- 学校や大人に助けてほしいこと、必要な支援については、国調査と同様に、いずれも「特にない」が約5割となっているが、そのほか「自由に使える時間がほしい」、「自分のいまの状況について話を聞いてほしい」が高く、「学校の勉強や受験勉強など学習のサポート」も一定の回答がみられる。

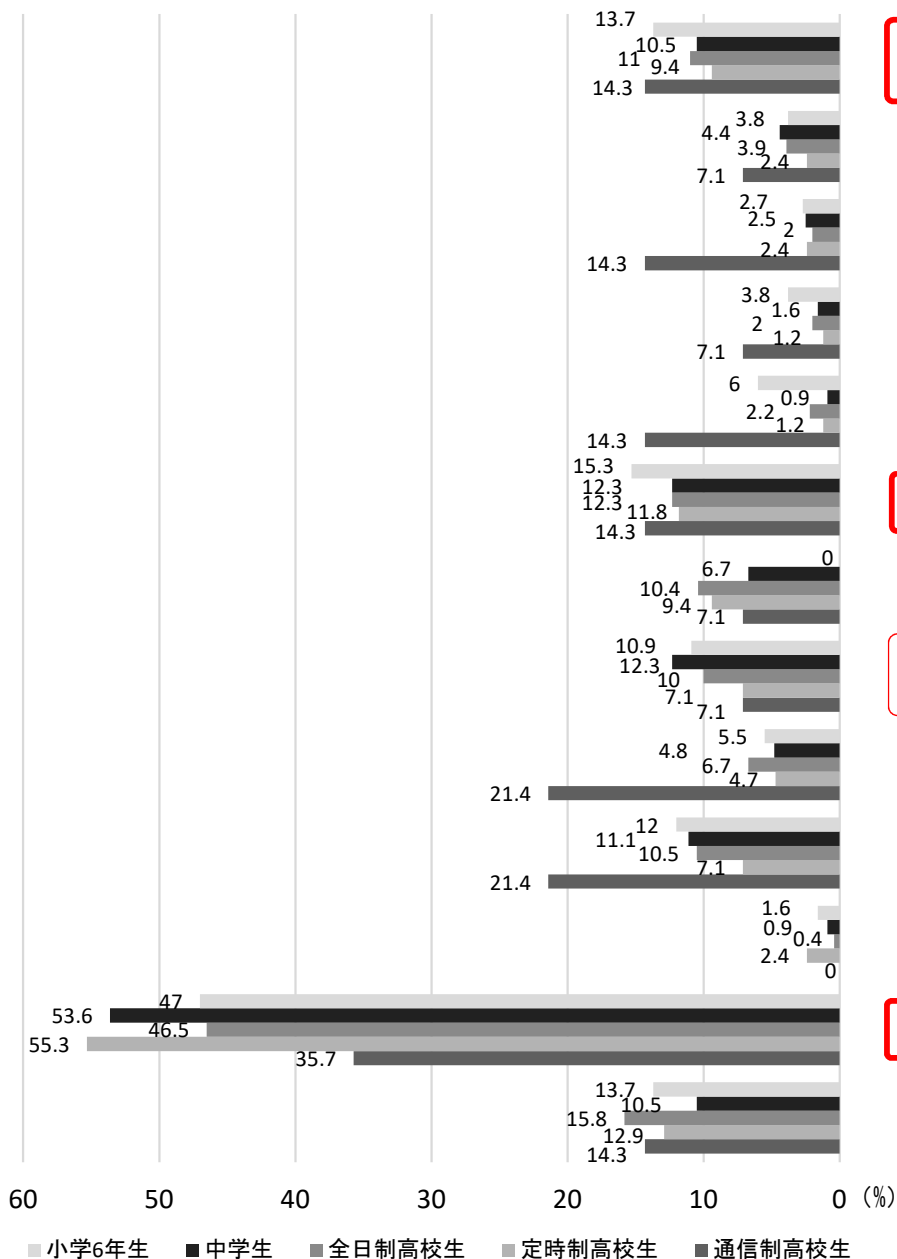
### ⑩学校や大人に助けてほしいこと、必要な支援（複数回答）

(%)

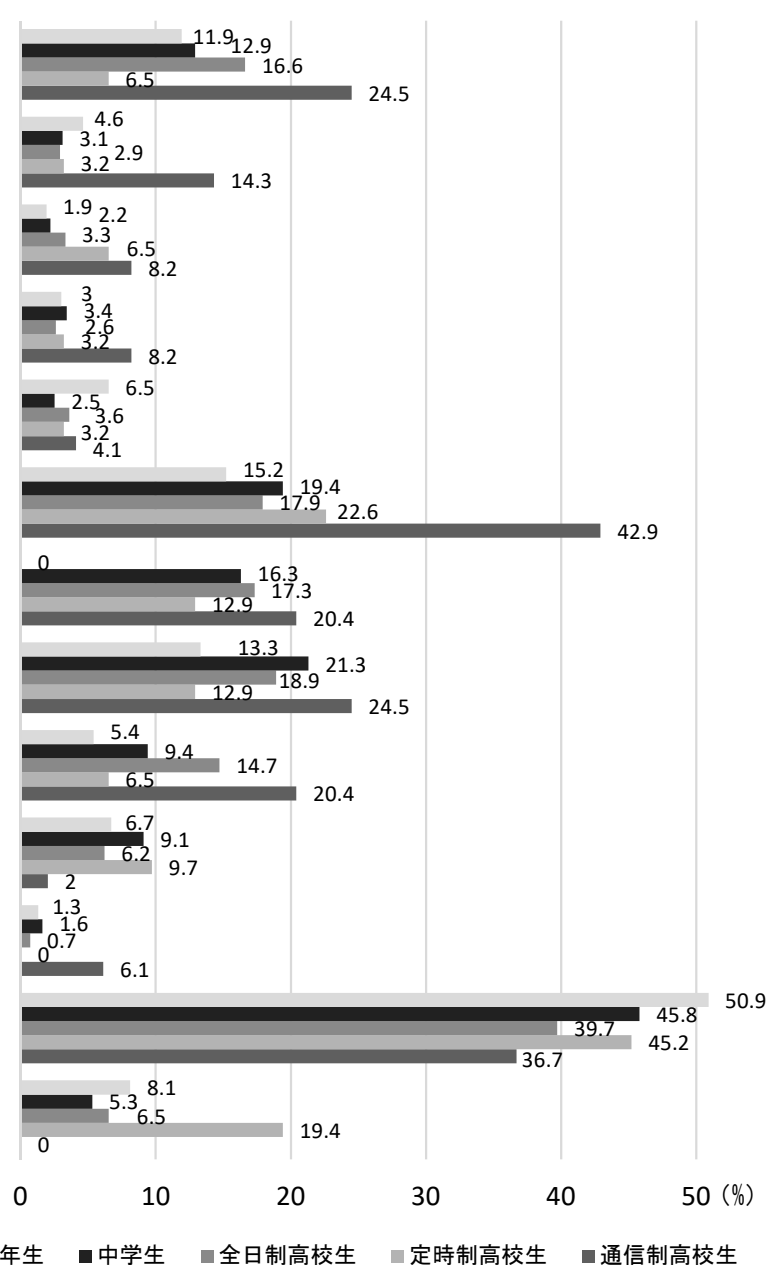
	調査数 (n=)	自分のいまの状況について話を聞いてほしい	家族のお世話について相談してほしい	家族の病気や障がい、ケアのことなどについてわかりやすく説明してほしい	自分が行っているお世話のすべてを代わりにしてくれる人やサービスがほしい	自分が行っているお世話の一部を代わりにしてくれる人やサービスがほしい	自由に使える時間がほしい	進路や就職など将来の相談のしてほしい	学校の勉強や受験勉強など学習のサポート	家庭への経済的な支援	わからない	その他	特にない	無回答
小学6年生	183	13.7	3.8	2.7	3.8	6.0	15.3	-	10.9	5.5	12.0	1.6	47.0	13.7
中学生	640	10.5	4.4	2.5	1.6	0.9	12.3	6.7	12.3	4.8	11.1	0.9	53.6	10.5
全日制高校生	538	11.0	3.9	2.0	2.0	2.2	12.3	10.4	10.0	6.7	10.6	0.4	46.5	15.8
定時制高校生	85	9.4	2.4	2.4	1.2	1.2	11.8	9.4	7.1	4.7	7.1	2.4	55.3	12.9
通信制高校生	14	14.3	7.1	14.3	7.1	14.3	14.3	7.1	7.1	21.4	21.4	0	35.7	14.3

⑪学校や大人に助けてほしいこと、必要な支援（複数回答）

茨城県



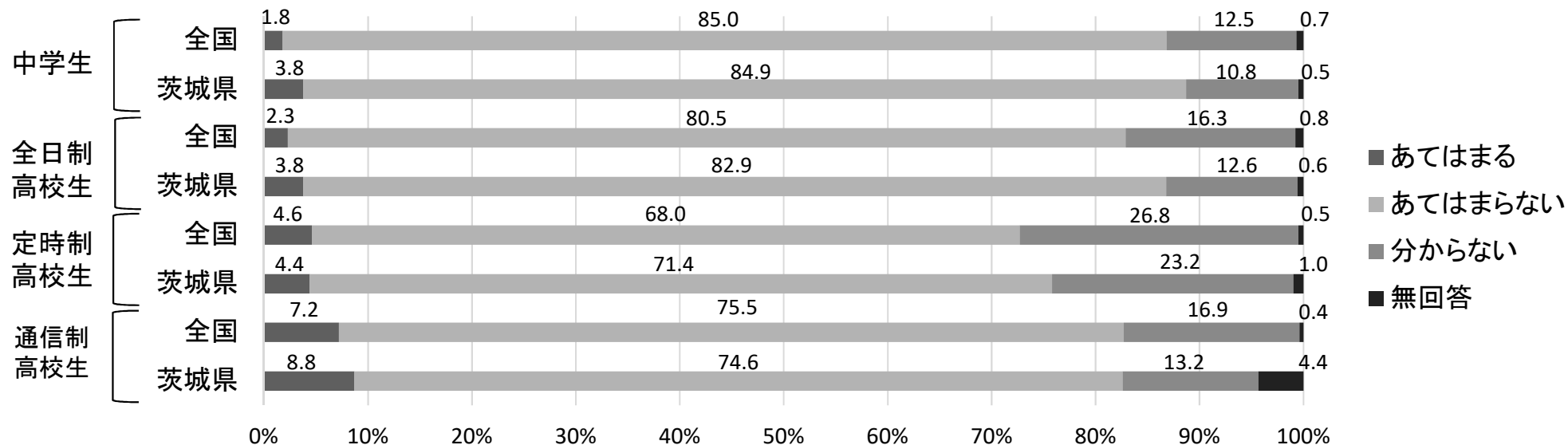
全国(国調査)



# (1) 児童・生徒を対象としたヤングケアラー実態調査 (⑪～⑮ ヤングケアラーの自覚)

○ ヤングケアラーの定義を示し、ヤングケアラーにあてはまるか聞いたところ、あてはまると答えた人は定時制高校生を除き、国調査より高いが、一方で、分からないとの回答は国より低かった。

## ⑪ヤングケアラーの自覚



○ 世話をしている家族がいると回答した人のうち、ヤングケアラーにあてはまると回答した人は、あてはまらないと回答した人より、世話の頻度が高く、世話の時間が長い傾向があり、世話の負担感が大きいことが伺える。  
分からないと回答した人も同様の傾向があることから、ヤングケアラーの自覚がない可能性が考えられる。

## ⑫ヤングケアラーの自己認識 × 世話の頻度 (%)

		調査数 (n=)	ほぼ毎日	週に3～5日	週に1～2日	1ヶ月に数日	無回答
ヤングケアラーの自己認識	あてはまる	262	54.2	21.0	14.5	5.3	5.0
	あてはまらない	538	40.3	14.1	16.0	6.3	23.2
	わからない	443	48.5	16.0	13.1	6.5	15.8

## ⑬ヤングケアラーの自己認識 × 世話に費やす時間 (%)

		調査数 (n=)	3時間未満	3～7時間未満	7時間以上	無回答
ヤングケアラーの自己認識	あてはまる	262	60.7	24.0	8.8	6.5
	あてはまらない	538	53.7	16.5	4.9	24.9
	わからない	443	56.7	17.0	8.3	18.1



○ ヤングケアラーにあてはまると回答した人は、あてはまらないと回答した人より、「世話による制約」や「学校や大人に助けてほしいこと」など、多くの項目で割合が高い。

分からないと回答した人も同様の傾向があることから、ヤングケアラーの自覚がない可能性が考えられる。

⑭ヤングケアラーの自己認識 × 世話による制約（複数回答）

(%)

		調査数(n=)	学校に行きたくても行けない	どうしても学校を遅刻・早退してしまう	宿題をする時間や勉強する時間が取れない	睡眠が十分に取れない	友人と遊ぶことができない	部活や習い事ができない、もしくは辞めざるを得なかった	進路の変更を考えざるを得ない、もしくは進路を変更した	自分の時間が取れない	その他	特になし	無回答
ヤングケアラーの自己認識	あてはまる	262	5.7	3.8	20.2	15.6	19.1	5.7	5.7	29.4	1.9	42.0	4.6
	あてはまらない	538	1.3	0.7	5.8	5.4	4.6	0.7	0.6	8.7	0.7	61.7	21.6
	わからない	443	1.8	2.9	11.1	14.4	11.1	1.6	2.5	20.1	1.6	54.4	12.9

⑮ヤングケアラーの自己認識 × 学校や大人に助けてほしいこと（複数回答）

(%)

		調査数(n=)	自分のいまの状況について話を聞いてほしい	家族のお世話について相談にのってほしい	家族の病気や障がい、ケアのことなどについてわかりやすく説明してほしい	自分が行っているお世話のすべてを代わってくれる人やサービスがほしい	自分が行っているお世話の一部を代わってくれる人やサービスがほしい	自由に使える時間がほしい	進路や就職など将来の相談にのってほしい	学校の勉強や受験勉強など学習のサポート	家庭への経済的な支援	わからない	その他	特になし	無回答
ヤングケアラーの自己認識	あてはまる	262	18.3	8.8	7.3	5.3	4.2	20.6	11.5	14.5	11.8	11.8	0.8	40.5	5.3
	あてはまらない	538	6.7	2.0	0.6	0.6	0.6	6.7	6.1	9.9	3.2	8.7	0.6	57.6	14.5
	わからない	443	11.5	4.1	2.3	1.4	1.6	14.9	10.2	10.8	5.9	13.1	1.4	51.2	9.5

## (2) 学校を対象としたヤングケアラー実態調査（①ヤングケアラーの認知度、②～④状況等）

- ヤングケアラーの概念の認識は、すべての学校種で100%に近く、認知度は高い。一方で、意識して対応している学校は、小学校、中学校、全日制高校で約半数と、対応が分かれている。
- ヤングケアラーと思われる子どもの有無については、小学校、中等教育学校を除き、いずれも「いる」が最も高い。また、小学校では「いない」の割合が、中学校、高等学校に比べ高い。
- ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した学校の子どもの状況については、いずれも「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」が最も高い。  
高校では「家計を支えるために、アルバイト等をしている」も高く、また、小学校、中学校、全日制・定時制高校において、「家族の通訳をしている」も2割～5割程度みられた。
- 外部の支援につないだケースの有無は、いずれも「外部の支援につないでいない」が最も高い。

### ①ヤングケアラーの概念の認識

認識している (%)

	調査数 (n=)	言葉を知らない	言葉は聞いたことがあるが、具体的には知らない	認識している		無回答
				言葉は知っているが、学校としては特別な対応をしていない	言葉を知っており、学校として意識して対応している	
小学校	39	0.0	0.0	53.8	43.6	2.6
中学校	166	0.6	1.8	47.0	50.6	-
中等教育学校	4	0.0	0.0	100.0	0.0	-
全日制高校	75	0.0	1.3	50.7	48.0	-
定時制高校	7	0.0	0.0	28.6	71.4	-
通信制高校	5	0.0	0.0	80.0	20.0	-
複数課程併設高校	5	0.0	0.0	40.0	60.0	-

### ②ヤングケアラーと思われる子どもの有無

(%)

	調査数 (n=)	いる	いない	わからない
小学校	39	23.1	51.3	25.6
中学校	166	46.4	33.1	20.5
中等教育学校	4	0.0	75.0	25.0
全日制高校	75	48.0	21.3	30.7
定時制高校	7	85.7	14.3	0.0
通信制高校	5	40.0	20.0	40.0
複数課程併設高校	5	80.0	20.0	0.0

※複数過程併設高校は、全日制・定時制併設高校と定時制・通信制併設高校の合計。以下同じ。

③「ヤングケアラー」と思われる子どもの状況（複数回答）

(%)

	小学校 (n=9)	中学校 (n=77)	全日制高校 (n=36)	定時制高校 (n=6)	通信制高校 (n=2)	複数課程 併設高校 (n=4)
障がいや病気のある家族に代わり、家事をしている	0.0	27.3	36.1	66.7	0.0	25.0
家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている	66.7	77.9	66.7	100.0	100.0	100.0
家族の代わりに、障がいや病気のあるきょうだいの世話をしている	11.1	5.2	11.1	16.7	0.0	25.0
目の離せない家族の見守りや声掛けをしている	0.0	15.6	13.9	0.0	0.0	25.0
家族の通訳をしている	33.3	23.4	36.1	50.0	0.0	25.0
家計を支えるために、アルバイト等をしている	-	2.6	44.4	83.3	100.0	25.0
アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族に対応している	0.0	1.3	2.8	16.7	0.0	25.0
病気の家族の看病をしている	0.0	10.4	19.4	16.7	0.0	0.0
障がいや病気のある家族の身の回りの世話をしている	0.0	14.3	19.4	0.0	50.0	25.0
障がいや病気のある家族の入浴やトイレの介助をしている	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0
その他	11.1	6.5	2.8	0.0	0.0	0.0

④外部の支援につないだケースの有無（複数回答）

(%)

	小学校 (n=9)	中学校 (n=77)	全日制高校 (n=36)	定時制高校 (n=6)	通信制高校 (n=2)	複数課程 併設高校 (n=3)
要対協に通告したケースがある	0.0	9.1	2.8	0.0	0.0	0.0
要対協に通告するほどではないが、学校以外の外部の支援につないだケースがある	44.4	36.4	13.9	33.3	0.0	25.0
外部の支援につないでいない	44.4	54.5	83.3	83.3	100.0	75.0

## (2) 学校を対象としたヤングケアラー実態調査 (⑤ 必要な支援)

○ 支援のために必要だと思うことは、「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」、「教職員がヤングケアラーについて知ること」といった普及啓発と、「子どもが教員に相談しやすい関係をつくること」、「SSWやSCなどの専門職の配置が充実すること」、「学校がヤングケアラーの支援について相談できる機関があること」といった相談体制が必要と考えている学校が多い。

### ⑤ 支援のために必要だと思うこと (複数回答)

(%)

	小学校 (n=39)	中学校 (n=166)	中等教育 学校(n=4)	全日制高校 (n=75)	定時制高校 (n=7)	通信制高校 (n=5)	複数課程 併設高校 (n=5)
子ども自身がヤングケアラーについて知ること	92.3	76.5	100.0	92.0	85.7	60.0	80.0
教職員がヤングケアラーについて知ること	94.9	88.6	100.0	90.7	71.4	80.0	100.0
学校にヤングケアラーが何人いるか把握すること	71.8	62.7	100.0	57.3	14.3	20.0	40.0
SSWやSCなどの専門職の配置が充実すること	56.4	66.3	75.0	50.7	28.6	20.0	60.0
子どもが教員に相談しやすい関係をつくること	94.9	84.3	75.0	82.7	71.4	100.0	80.0
ヤングケアラーについて検討する組織を校内につくること	23.1	29.5	25.0	21.3	14.3	0.0	20.0
学校にヤングケアラー本人や保護者が相談できる窓口があること	53.8	50.0	25.0	40.0	14.3	40.0	40.0
学校がヤングケアラーの支援について相談できる機関があること	56.4	53.6	50.0	50.7	71.4	40.0	20.0
ヤングケアラーを支援するNPOなどの団体が増えること	25.6	42.8	0.0	26.7	71.4	0.0	40.0
福祉と教育の連携を進めること	28.2	19.9	0.0	12.0	0.0	0.0	20.0
その他	2.6	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
特になし	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

## (2) 学校を対象としたヤングケアラー実態調査 (⑥ 具体的な対応事例)

○ ヤングケアラーと思われる生徒への対応において、学校以外の外部支援につないだ事例について、ヒアリング調査を実施した。

### ⑥具体的な対応事例

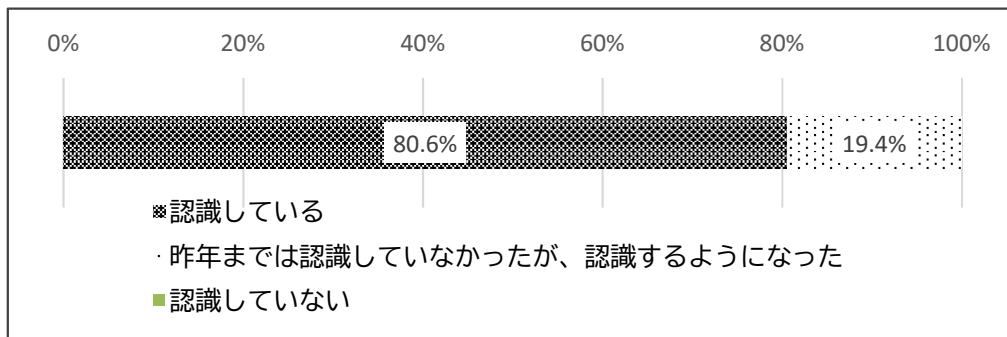
	事例1 (ひとり親のケース)	事例2 (祖父母と暮らすケース)
事例の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学3年女子。</li> <li>・ 母と5人きょうだい(兄、本人、第2人(幼児)、妹1人(乳児))の家族。</li> <li>・ 母が外出する時、本人は早退し、幼いきょうだいの子守をしている。</li> <li>・ 本人は、家事や食事作りのほか、乳児にミルクを飲ませたり、風呂に入れることもある。</li> <li>・ 本人は学校を休みはじめ、勉強もついていけず、友人とも疎遠になっている。高校に行きたいと言っているが、学校の授業についていけなくなっている。</li> <li>・ 精神的に不安定で、ピアス、髪を染める、リストカットなどもあり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学2年女子。</li> <li>・ 高齢の祖母と中学生の姉、本人の3人家族。</li> <li>・ 近隣に住む「おば」が、時々訪問し、姉妹の面倒を見てくれている。</li> <li>・ 姉妹はしっかりした子ども達で、特に欠席はない。</li> <li>・ 家では姉妹で助け合い家事をしているが、祖母は高齢のため、学校への提出書類等の対応が困難で、保護者の承諾が必要な書類等の提出が遅れがち。</li> <li>・ 身だしなみが整っていない。</li> </ul>
発見・支援までの経緯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本人が不登校気味になり、面談や家庭訪問を行うことによりヤングケアラーと判断した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校において姉からの聞き取りを行った際に判明した。</li> </ul>
SSW、SCの関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ SSWは月1回家庭訪問をしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒指導部委員会において毎週SSWに参加してもらい、情報交換をしている。</li> </ul>
困りごとを抱える生徒への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担任が毎日声掛けするなど、気にかけている。</li> <li>・ 本人は教室で授業を受けるのが負担となっているため、校内に設けられているフリースペースに登校している。フリースペースはリラックスできるため、本人はそこには来られている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市のケース会議において、市の福祉担当課、学校、教育委員会が情報共有し、市が福祉的支援に動いている。</li> <li>・ 姉は中学卒業後、寮がある高校に進学。弁護士なども関わり、祖母の施設入所を勧めている。</li> <li>・ 学校としては、生徒の様子を見て、声かけをしたり、「おば」へ電話連絡し、進路関係の情報提供などを行っている。</li> </ul>
配慮していること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒指導部会で毎週、現状を情報共有している。</li> <li>・ 市の福祉担当課と情報共有している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 周りに気付かれないようさりげなく声掛けをしている。</li> <li>・ 担任や養護教諭など複数人で見守りをしている。</li> </ul>
支援にあたって必要なこと、難しい点、課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市は家庭訪問や面談を行い、本人が学校に来られるよう家庭に働きかけているが、保護者の理解が得られていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校だけでは支援が難しい。学校から支援を求めた上、市や教育委員会と連携し、福祉的な支援が必要。</li> <li>・ 本ケースはたまたま本人から相談があり、把握できたが、子ども達から家庭の状況を言うことは少なく、家庭内の状況把握が難しい。コロナの影響等もあり家庭訪問が無くなり、一層把握が難しくなっている。</li> </ul>

	事例3（きょうだいの多いケース）	事例4（家族が病気のケース）
事例の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学3年女子。</li> <li>・ 父、母と5～6人きょうだい（高校生の姉、本人、幼稚園や乳児）の家族</li> <li>・ 子どもが多く、母親の育児や家事負担が大変であるため、姉と本人が家事や幼いきょうだいの世話を手伝っている。</li> <li>・ 本人は5月半ばから不登校。担任が家庭訪問し、本人と会えた際には、学校に行きたい、テストを受けたいなどの訴えがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学3年女子。</li> <li>・ 父、母、姉、兄、本人の5人家族。</li> <li>・ 母親の通院の付き添いや入院手続きなどの世話をしていた。</li> <li>・ 母親は精神的に不安定で、通院、入院を繰り返していたが、現在、母親は保護され、家庭にはいない。</li> <li>・ 食事は、両親が準備してくれないため、自分（兄姉）で何とかしている。</li> <li>・ 現在は学校には来れていない。</li> </ul>
発見・支援までの経緯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 姉が在学中、姉の話から担任が家庭環境を把握していたため、本人が入学した際も話を引き継いでいた。</li> <li>・ 市の福祉担当課につなぎ、福祉的支援をメインに支援している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校低学年まで市の子育て担当課の支援を受けていたが、その後解消されている。</li> <li>・ 中学2年時に母親が入院した際は、入院の手続きを本人が行ったようだ。</li> <li>・ 中学2年時に母親が入院したのをきっかけに学校を欠席しがちになり、ヤングケアラーと認知し、市の子育て担当課に再度つないだ。</li> </ul>
SSW、SCの関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ SSWは今後関わってもらう予定。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 父親、本人が希望しないため、未実施。</li> <li>・ 市の教育相談員とはつながっていた。</li> </ul>
困りごとを抱える生徒への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担任が家庭訪問を継続している。</li> <li>・ 学校は生徒指導主事が調整担当となり、市の福祉担当課をはじめとして他機関と連携支援に取り組んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市の子育て担当課と連携し、定期的に家庭訪問を実施している。</li> <li>・ 家庭へ定期的に電話連絡をしている。</li> <li>・ 必要に応じ、父親との面談を実施している。</li> </ul>
配慮していること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本人は自宅学習している様子であるため、家庭訪問をして、学校の様子を伝えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生存確認を行っている。</li> <li>・ 家庭とのつながりと連絡が途切れないようにしている。</li> </ul>
支援にあたって必要なこと、難しい点、課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校だけでは家庭内の状況を把握しきれない。外部機関に把握をお願いしたい。</li> <li>・ SSWの派遣の回数を増やしてもらいたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保護者の理解・協力が得られないため、状況の把握・具体の支援が難しい。</li> <li>・ ネグレクトの傾向がみられるので、虐待も視野に入れて対応しなければいけない。</li> </ul>

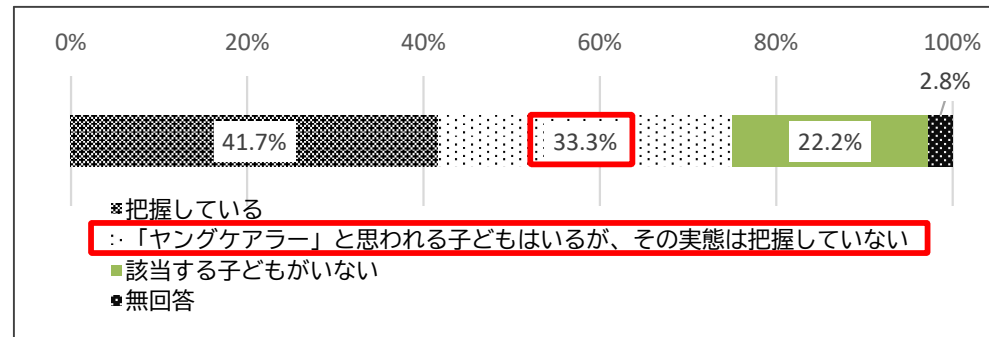
### (3) 要保護児童対策地域協議会を対象としたヤングケアラー実態調査(①ヤングケアラーの認知度、②③実態の把握)

- ヤングケアラーという概念の認知は、「認識している」、「昨年までは認識していなかったが、認識するようになった」の合計が100%であり、認知は高い。
- ヤングケアラーと思われる子どもの実態把握は、「把握している」が41.7%であるが、「『ヤングケアラー』と思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」が33.3%みられた。
- ヤングケアラーと思われる子どもの実態を把握していない理由は、「家庭内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」が91.7%、「ヤングケアラーである子ども自身やその家族が『ヤングケアラー』という問題を認識していない」が50%と高いが、次いで「学校などでの様子を迅速に確認、把握することが難しい」、「介護や障害等の課題に関して、各関係機関や団体などとの情報共有が不足している」との回答も25%あった。

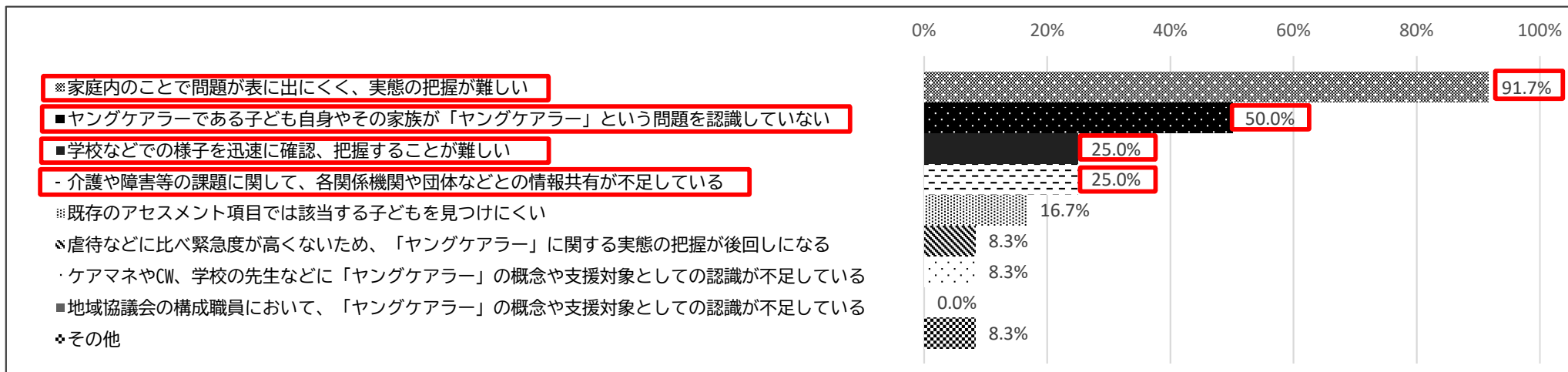
#### ①ヤングケアラーの概念の認知 (n=36)



#### ②ヤングケアラーと思われる子どもの実態の把握 (n=36)



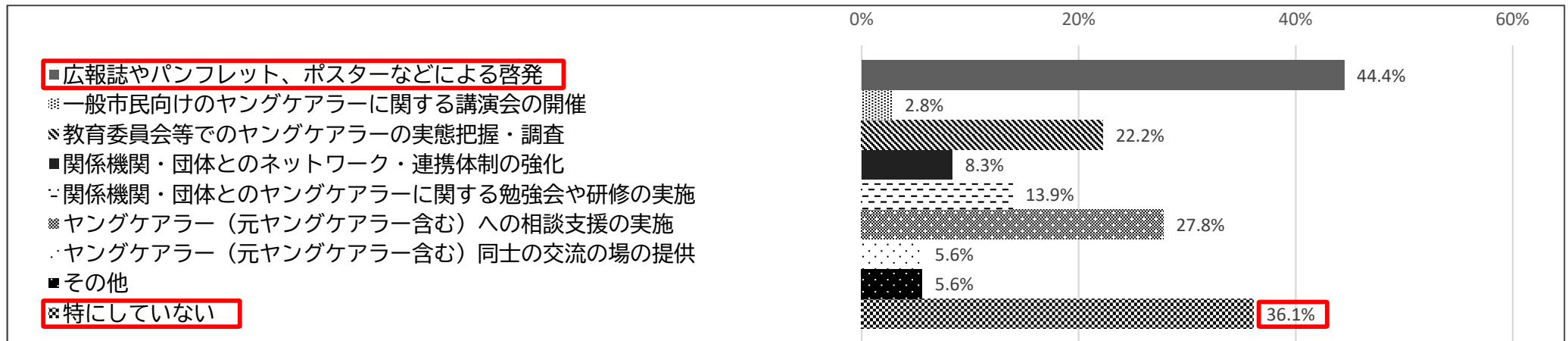
#### ③ヤングケアラーと思われる子どもの実態を把握していない理由 (複数回答) (n=12)



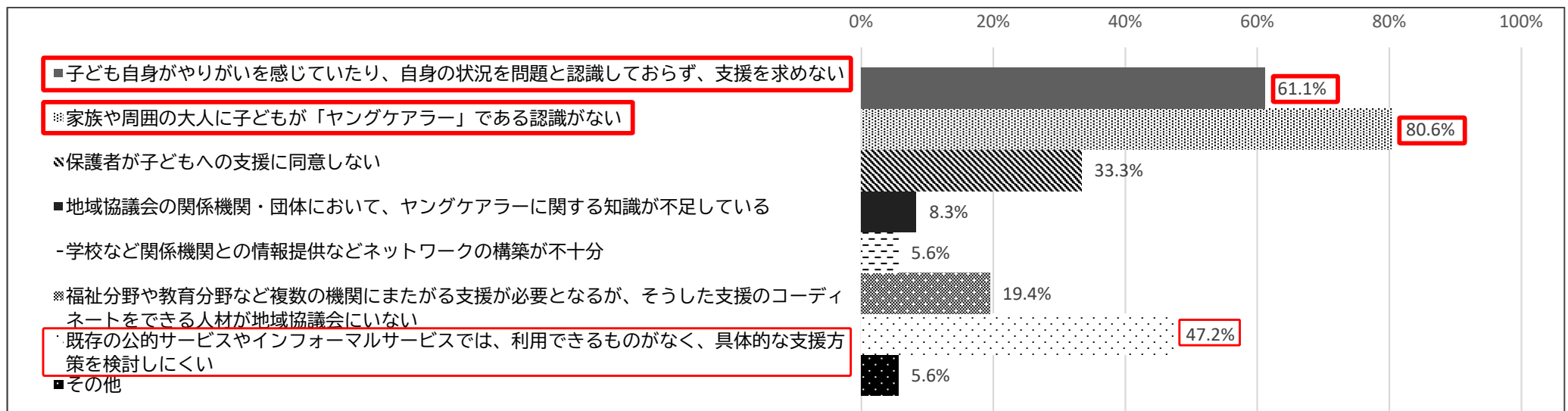
### (3) 要保護児童対策地域協議会を対象としたヤングケアラー実態調査 (④ 取組、⑤ 課題)

- ヤングケアラーに対する取組は、「広報誌やパンフレット、ポスターなどによる啓発」が最も高く44.4%であるが、「特にしていない」という回答も36.1%あった。
- 支援する際の課題は、「家族や周囲の大人に子どもが『ヤングケアラー』である認識がない」が最も高く80.6%、次いで「子ども自身がやりがいを感じていたり、自身の状況を問題と認識しておらず、支援を求めている」が61.1%だが、「既存の公的サービスやインフォーマルサービスでは、利用できるものがなく、具体的な支援方策を検討しにくい」も47.2%みられた。

#### ④ ヤングケアラーに対する取組 (複数回答) (n=36)



#### ⑤ ヤングケアラーと思われる子どもを支援する際の課題 (複数回答) (n=36)

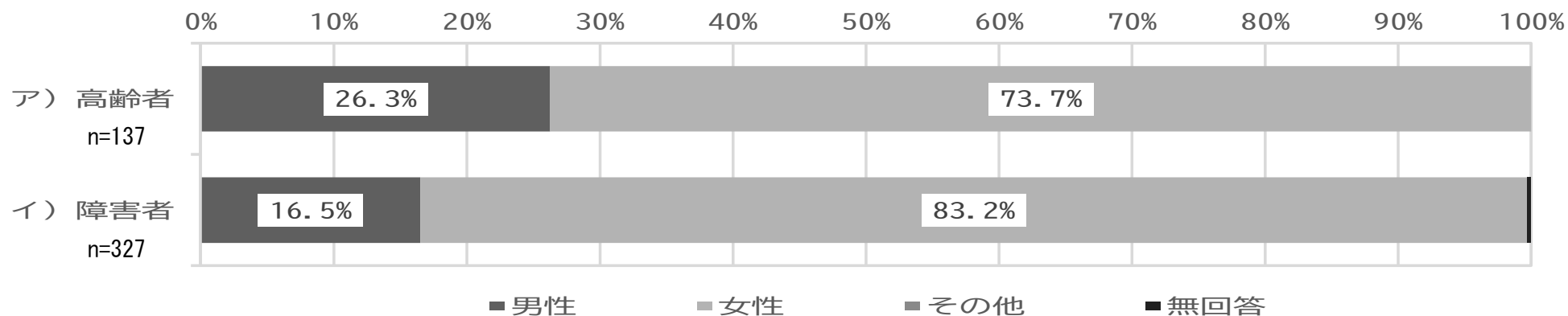




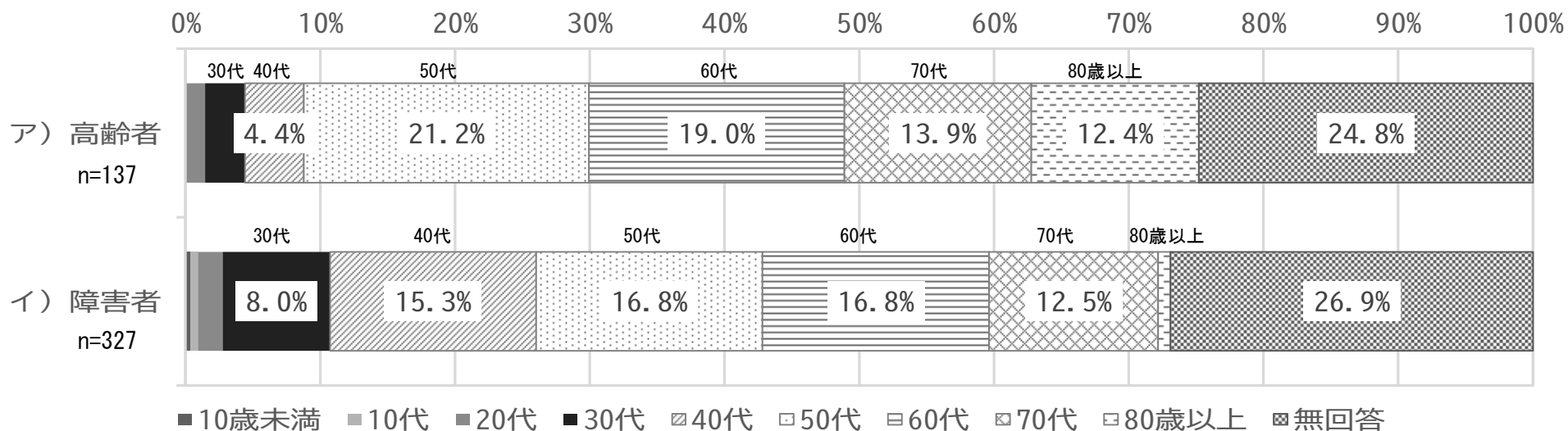
## (4) ケアラー当事者を対象としたケアラー実態調査 (①性別、②年齢)

- ケアラーの性別は女性が多く、高齢者のケアラーで7割強、障害者のケアラーで8割強となっている。
- 年代は、高齢者のケアラーは50代から、障害者のケアラーは30代から割合が高くなっており、幅広い年代にわたっている。

### ①ケアラーの性別



### ②ケアラーの年齢

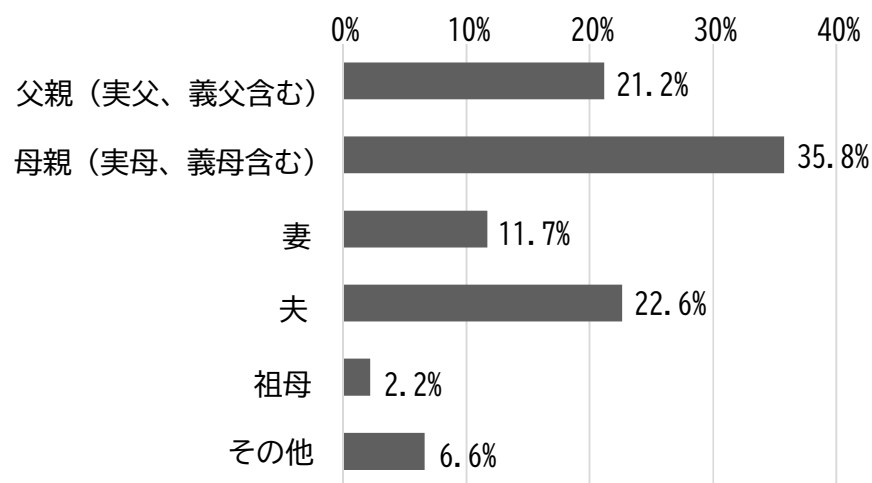


## (4) ケアラー当事者を対象としたケアラー実態調査 (③ケアの相手)

- 高齢者のケアラーのケアの相手(1人目)は、「母親」が35.8%で最も高く、次いで「夫」が22.6%、「父親」が21.2%、障害者のケアラーのケアの相手(1人目)は、「子ども」が68.5%で最も高く、次いで「母親」が12.8%、「父親」が5.8%となっている。  
また、いずれも、2人目、3人目をケアしている場合もある。

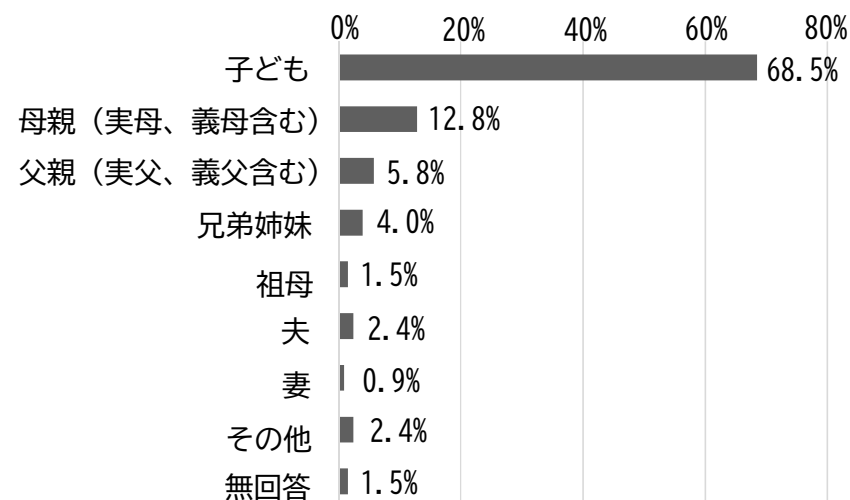
### ③被介護者との関係

【高齢者のケアラー】(1人目)



項目	1人目		2人目		3人目	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
父親(実父、義父含む)	29	21.2%	3	11.5%	2	28.6%
母親(実母、義母含む)	49	35.8%	16	61.5%	1	14.3%
妻	16	11.7%	0	0.0%	0	0.0%
夫	31	22.6%	1	3.8%	1	14.3%
祖母	3	2.2%	0	0.0%	0	0.0%
その他	9	6.6%	6	23.1%	3	42.9%
合計	137	100.0%	26	100.0%	7	100.0%

【障害者のケアラー】(1人目)

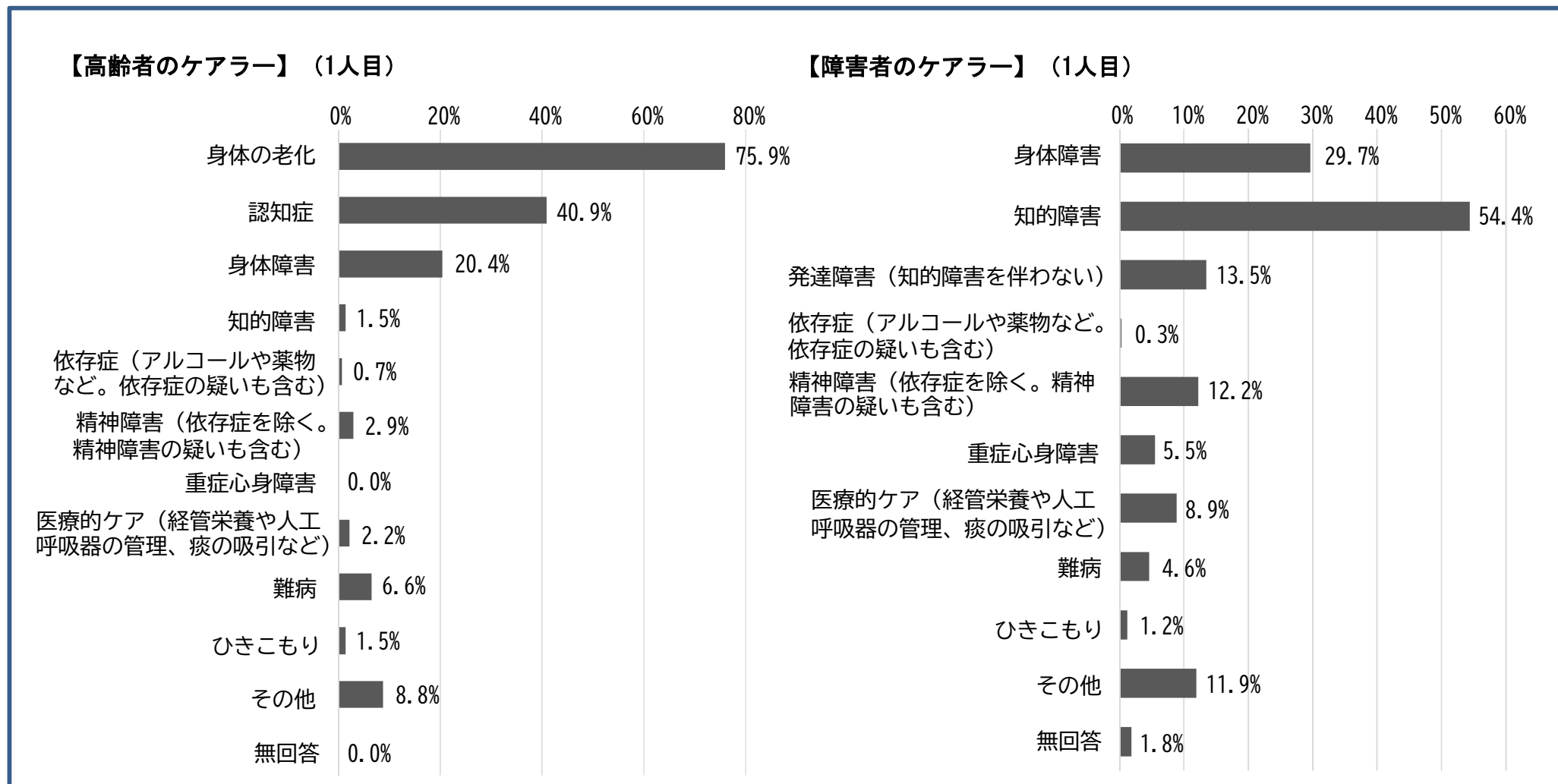


項目	1人目		2人目		3人目	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
子ども	224	68.5%	33	41.3%	5	35.7%
母親(実母、義母含む)	42	12.8%	27	33.8%	6	42.9%
父親(実父、義父含む)	19	5.8%	3	3.8%	1	7.1%
兄弟姉妹	13	4.0%	4	5.0%	1	7.1%
祖母	5	1.5%	0	0.0%	0	0.0%
夫	8	2.4%	3	3.8%	1	7.1%
妻	3	0.9%	5	6.3%	0	0.0%
その他	8	2.4%	5	6.3%	0	0.0%
無回答	5	1.5%	0	0.0%	0	0.0%
合計	327	100.0%	80	100.0%	14	100.0%

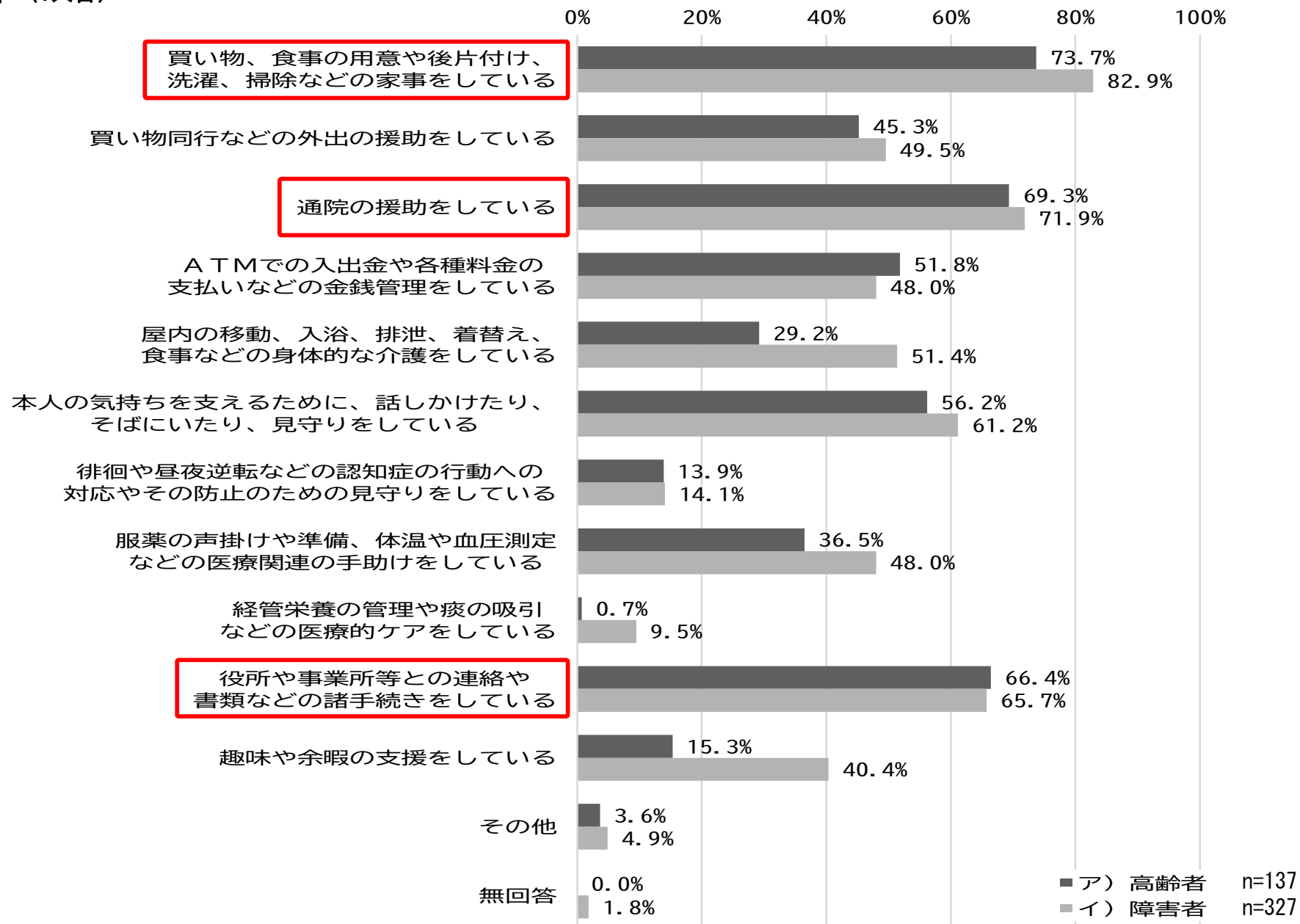
## (4) ケアラー当事者を対象としたケアラー実態調査 (④ケアの状況・内容)

- ケアの相手の状況は、高齢者のケアラーでは、「身体の老化」が75.9%で最も高く、次いで「認知症」が40.9%、「身体障害」が20.4%となっている。障害者のケアラーでは、「知的障害」が54.4%で最も高く、次いで「身体障害」が29.7%、「発達障害（知的障害を伴わない）」が13.5%となっている。
- ケアの内容は、いずれも「買い物、食事の用意や後片付け、洗濯、掃除などの家事をしている」が最も高く、ほか「通院の援助をしている」、「役所や事業所等との連絡や書類の諸手続きをしている」など多岐にわたっている。

### ④ケアしている相手の状況・内容（複数回答）

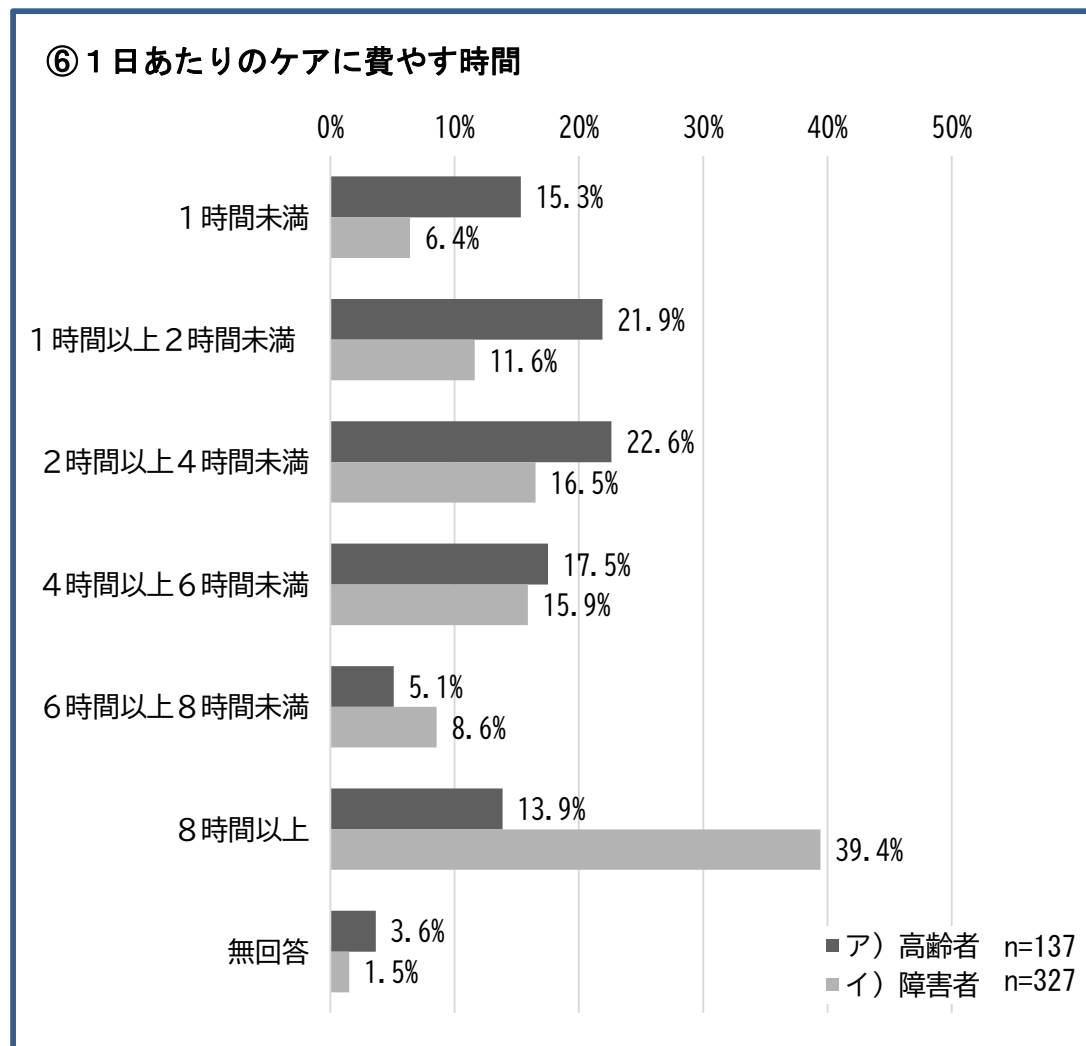
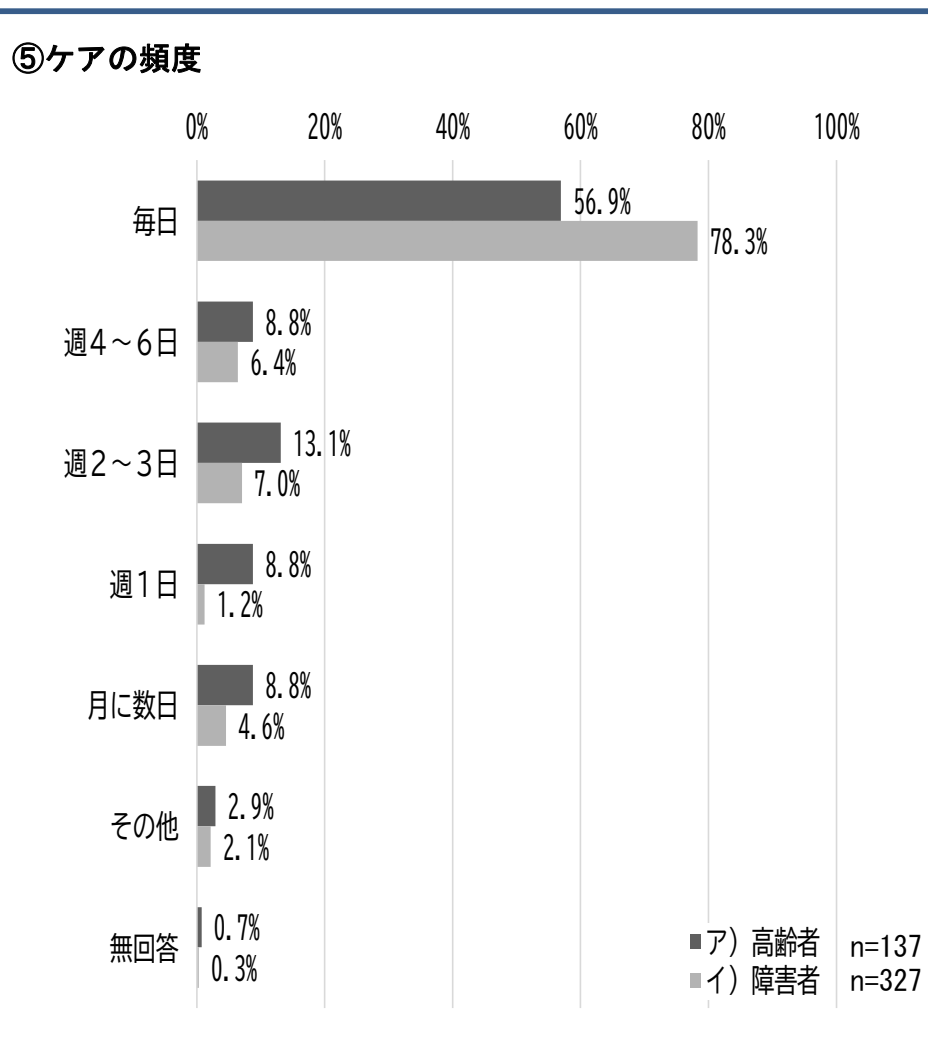


【ケアの内容】（1人目）



## (4) ケアラー当事者を対象としたケアラー実態調査 (⑤ ケアの頻度、⑥ 時間)

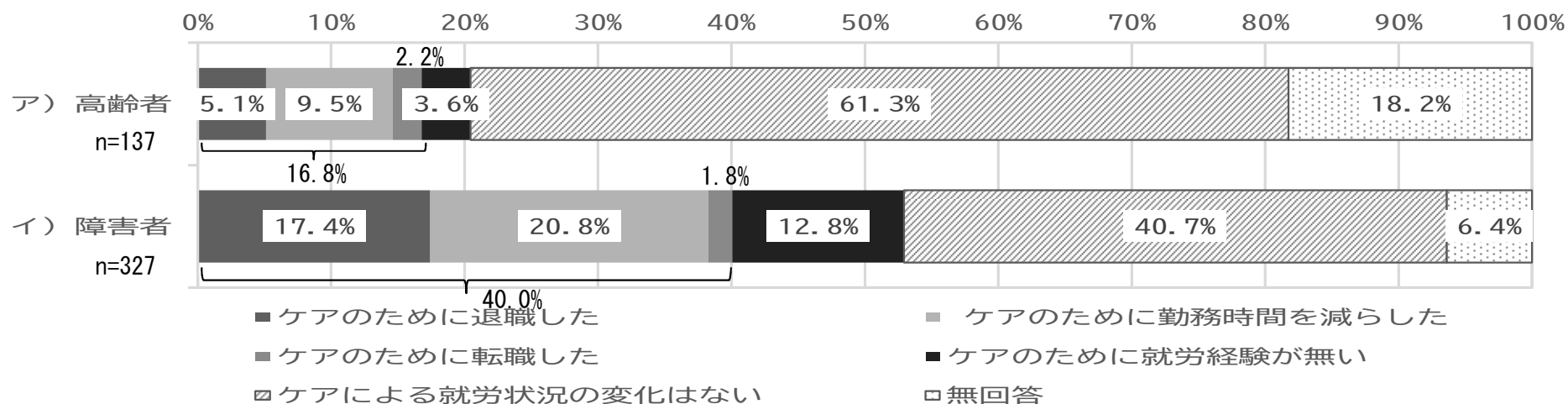
- ケアの頻度は、「毎日」の場合が高齢者のケアラーでは約6割、障害者のケアラーでは約8割と最も高くなっている。
- 1日あたりのケアに費やす時間は、「8時間以上」の場合が障害者のケアラーでは約4割と最も高くなっている。



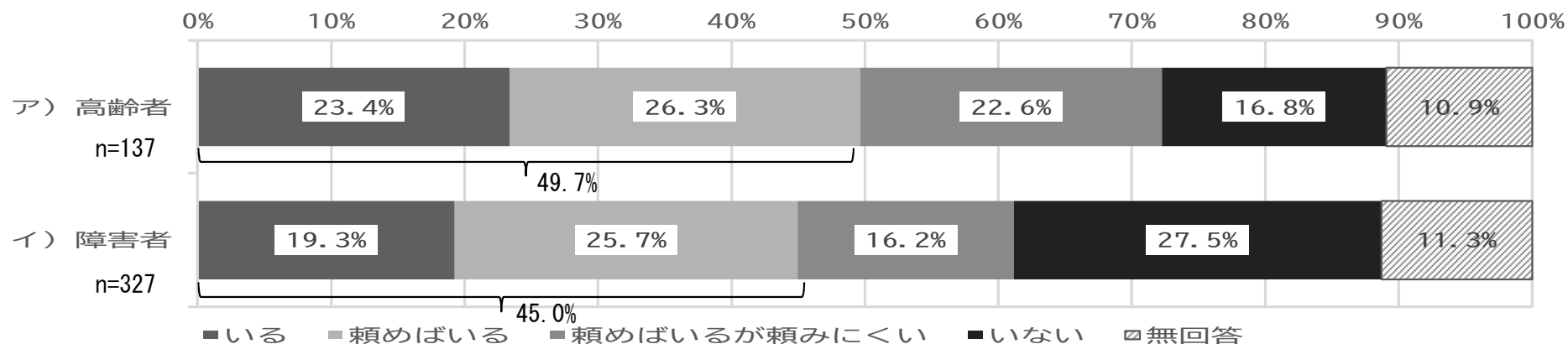
## (4) ケアラー当事者を対象としたケアラー実態調査 (⑦・⑧ 就労状況の変化等)

- ケアラーの就労状況の変化は、ケアのために退職や勤務時間を減らしたなどの場合が、高齢者のケアラーでは16.8%、障害者のケアラーでは40.0%となっており、障害者のケアラーでは、より就労状況の変化が高い。
- ケアを代わりにしてくれる人の有無は、「いる」「頼めばいる」場合に、高齢者のケアラーでは49.7%、障害者のケアラーでは45.0%となっている。また、障害者のケアラーでは、「いない」も27.5%と高い。

### ⑦ ケアによる就労状況の変化



### ⑧ 代わりにケアをする方の有無

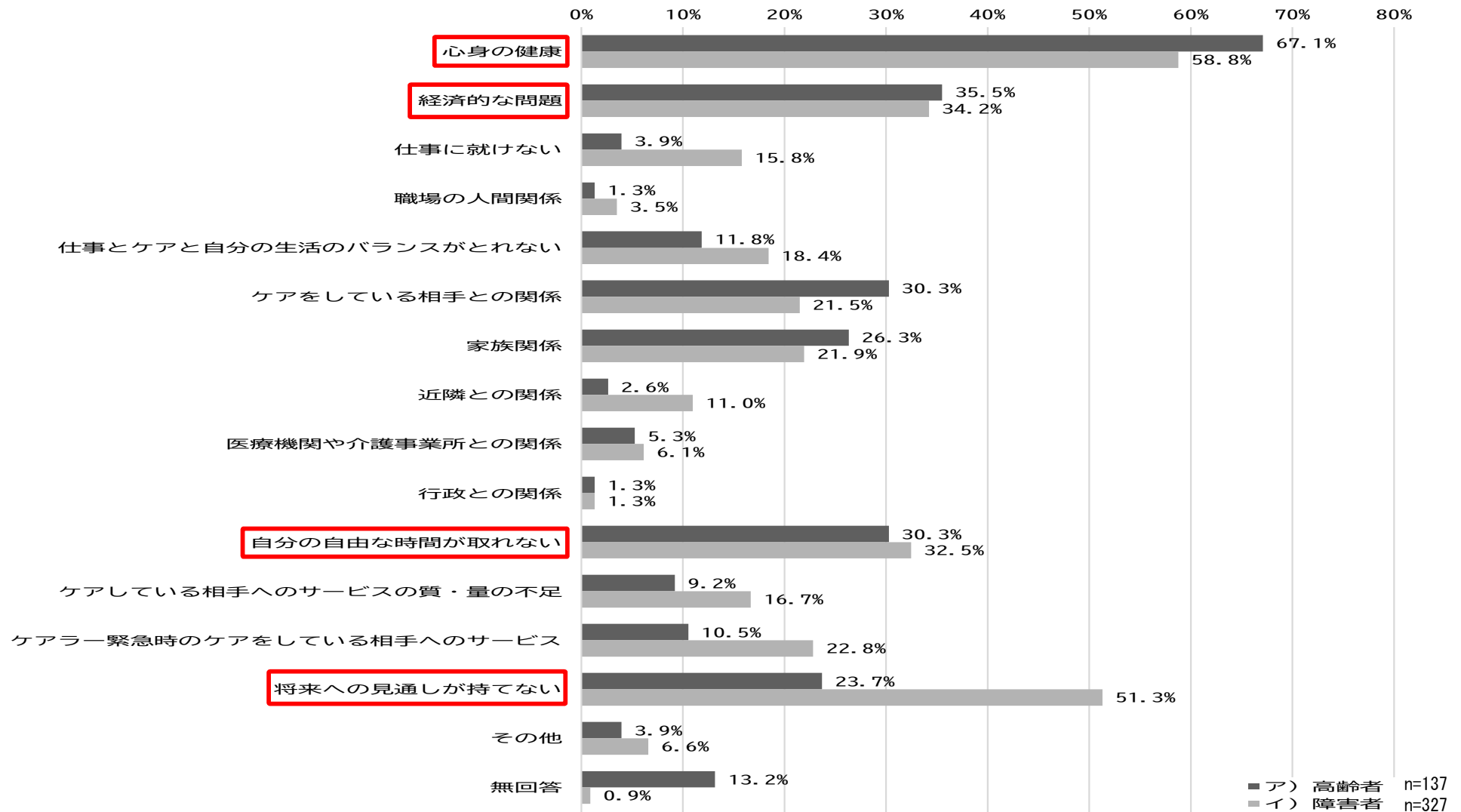


## (4) ケアラー当事者を対象としたケアラー実態調査 (⑨ ケアラーの悩み)

○ ケアラー自身の悩みは、高齢者・障害者のケアラーとも、「心身の健康」が最も高いほか、「経済的な問題」や「自分の自由な時間が取れない」も高くなっている。

障害者のケアラーでは、「将来への見通しが持てない」との回答の割合も高い。

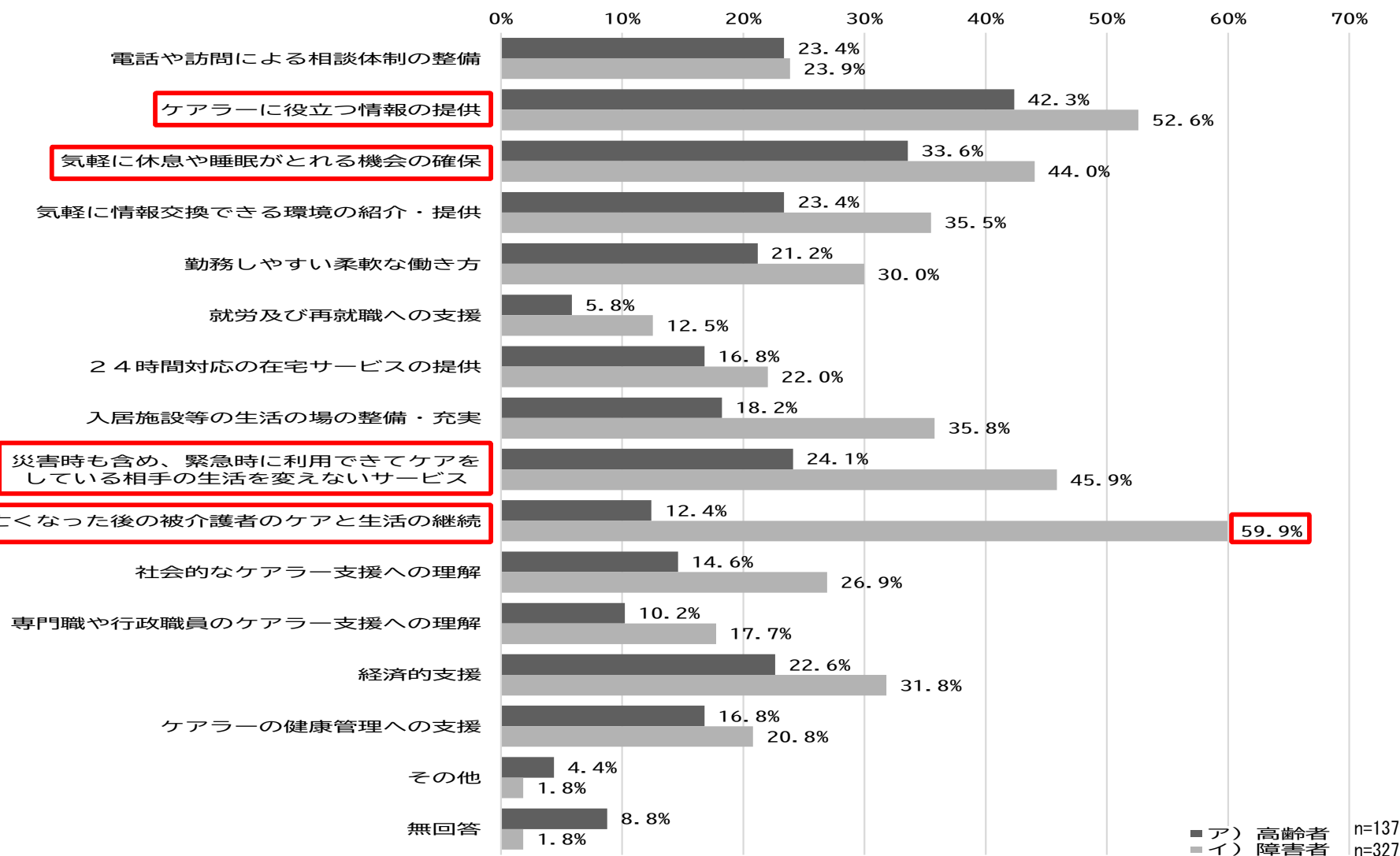
### ⑨ ケアラーの生活や人生に関する悩み (複数回答)



## (4) ケアラー当事者を対象としたケアラー実態調査 (⑩必要な支援)

○ 必要な支援については、高齢者・障害者のケアラーともに「ケアラーに役立つ情報の提供」、「気軽に休息等がとれる機会の確保」、「緊急時に利用できるサービス」の割合が高いが、障害者のケアラーでは「親や家族が亡くなった後のケアの継続」も約6割と高い。

### ⑩ケアラー自身に必要なと思われる支援 (複数回答)

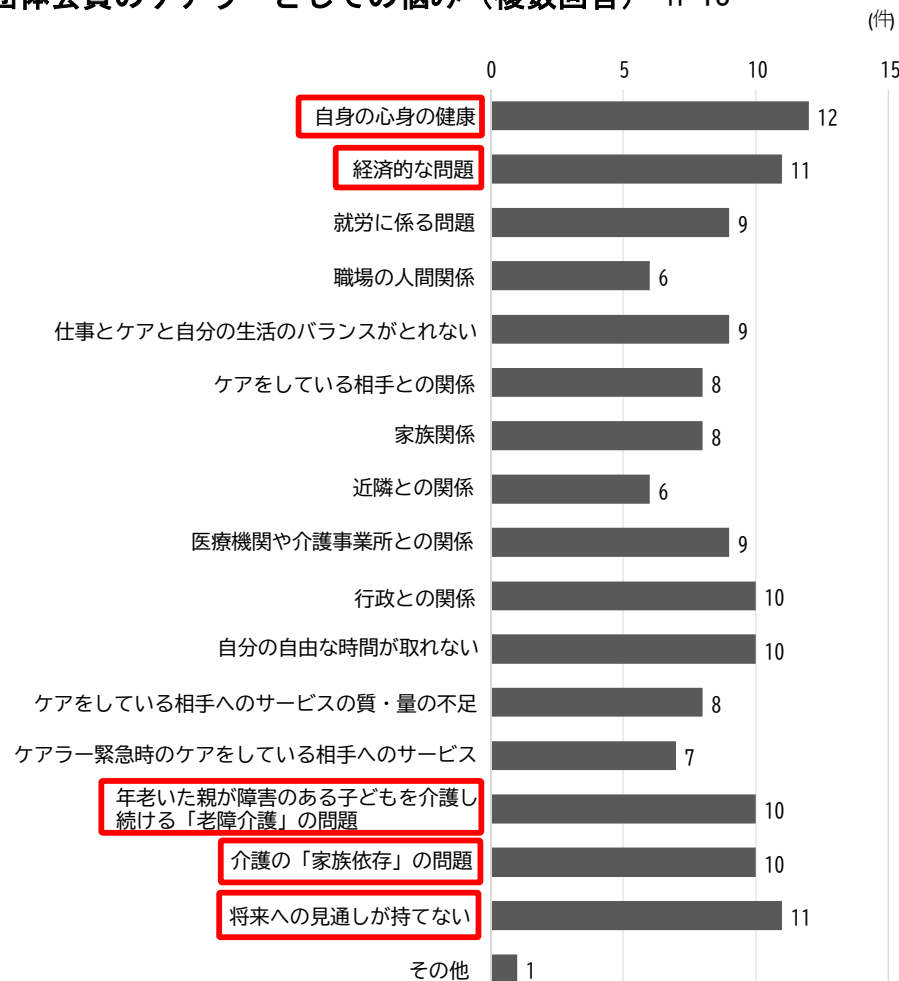




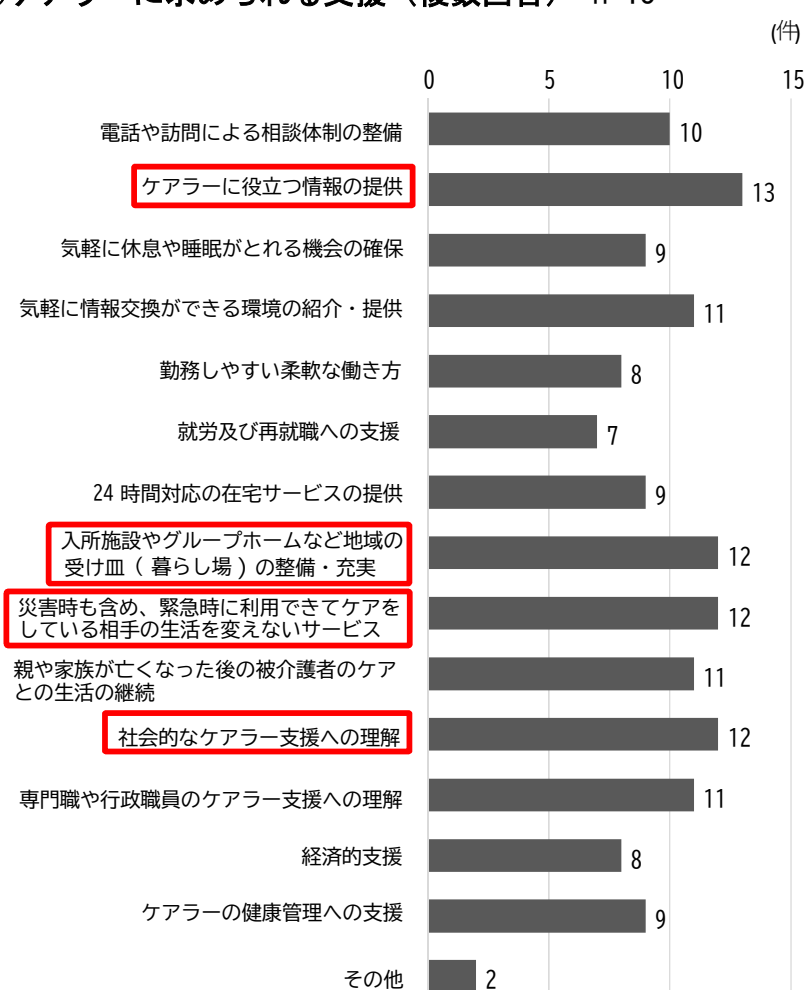
## (5) ケアラー当事者団体を対象としたケアラー実態調査

- ケアラーの悩みは、「自身の心身の健康」が最も高い。他にも「経済的な問題」、「将来への見通しが持てない」、「老障介護」、「介護の家族依存」など多岐にわたる。
- ケアラーに求められる支援については、「ケアラーに役立つ情報の提供」が最も高いほか、「地域の受け皿(暮らし場)の整備・充実」、「緊急時に利用できるサービス」、「社会的なケアラー支援への理解」などの割合も高い。

① 団体会員のケアラーとしての悩み（複数回答） n=13



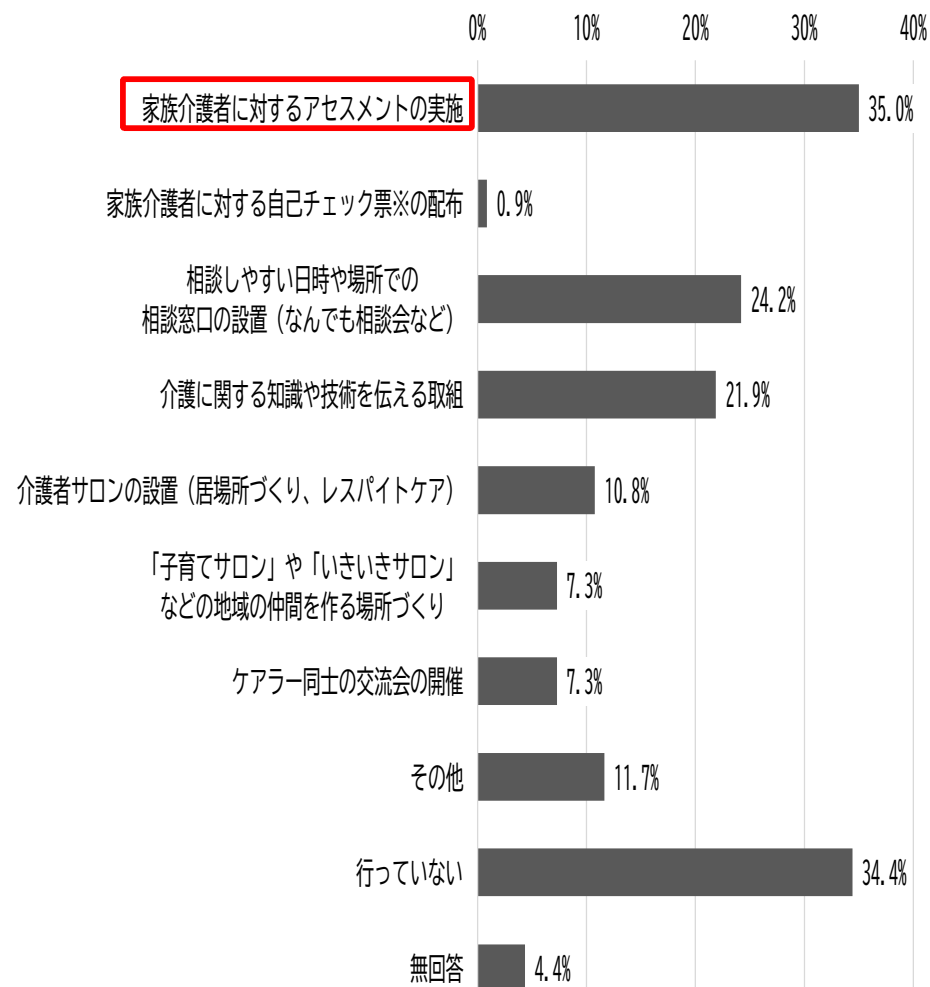
② ケアラーに求められる支援（複数回答） n=13



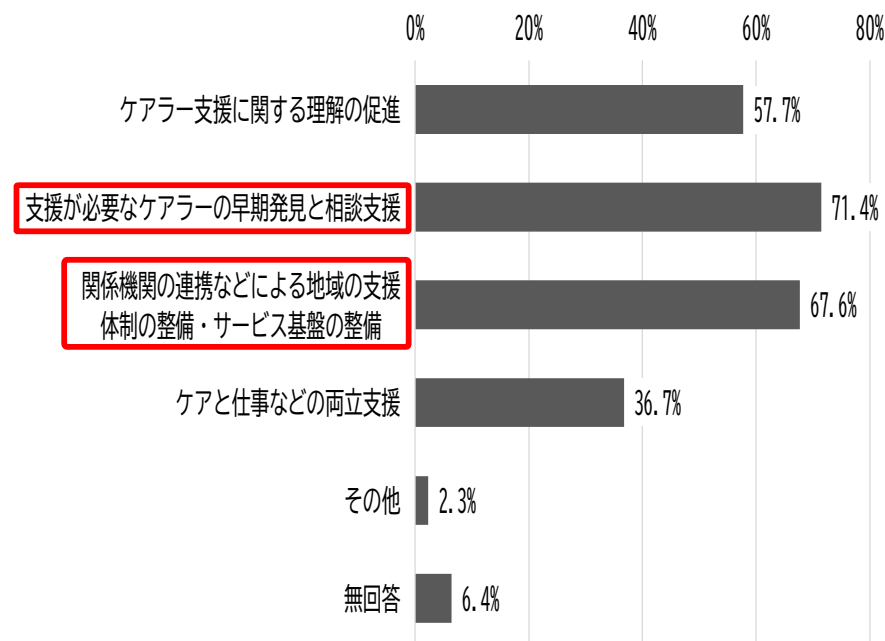
## (6) 支援機関を対象としたケアラー実態調査

- ケアラー本人へ直接的に行っている支援については、「家族介護者に対するアセスメントの実施」が最も高く35.0%となっている。
- ケアラー本人へ直接的に行っている支援以外にケアラー支援として必要なことについては、「支援が必要なケアラーの早期発見と相談支援」と「関係機関の連携などによる地域の支援体制の整備・サービス基盤の整備」の割合が高い。

① ケアラー本人へ直接的に行っている支援（複数回答） n=343

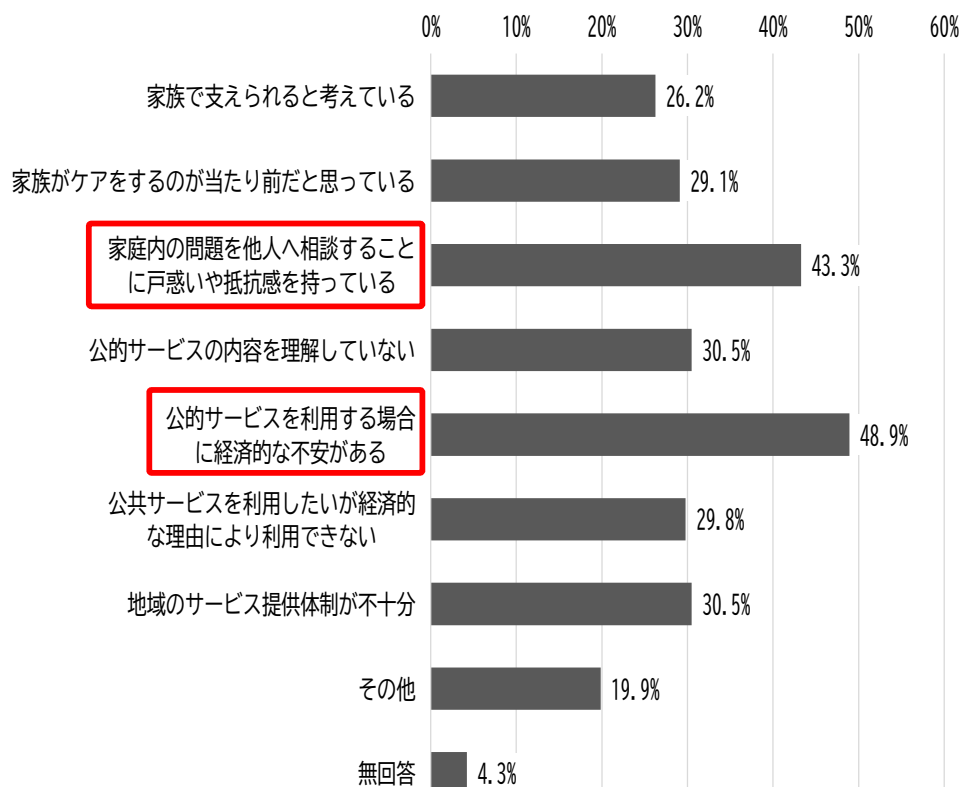


② ①の直接的支援以外にケアラー支援として必要なこと（複数回答） n=343



- 相談からサービス利用に至らなかった理由については、「公的サービスを利用する場合に経済的な不安がある」が48.9%と最も高く、次いで「家庭内の問題を他人へ相談することに戸惑いや抵抗感を持っている」が43.3%となっている。
- 支援がつながりにくい家庭を支援に結びつけるために必要なことについては、「関係機関と連携した支援ニーズの把握」が63.8%で最も高く、次いで「身近な支援者からの情報取得」が54.2%、「本人や家族による支援への理解」が51.3%となっている。

### ③相談からサービス利用に至らなかった理由（複数回答） n=141



### ④支援がつながりにくい家庭を支援に結びつけるために必要なこと（複数回答） n=343

